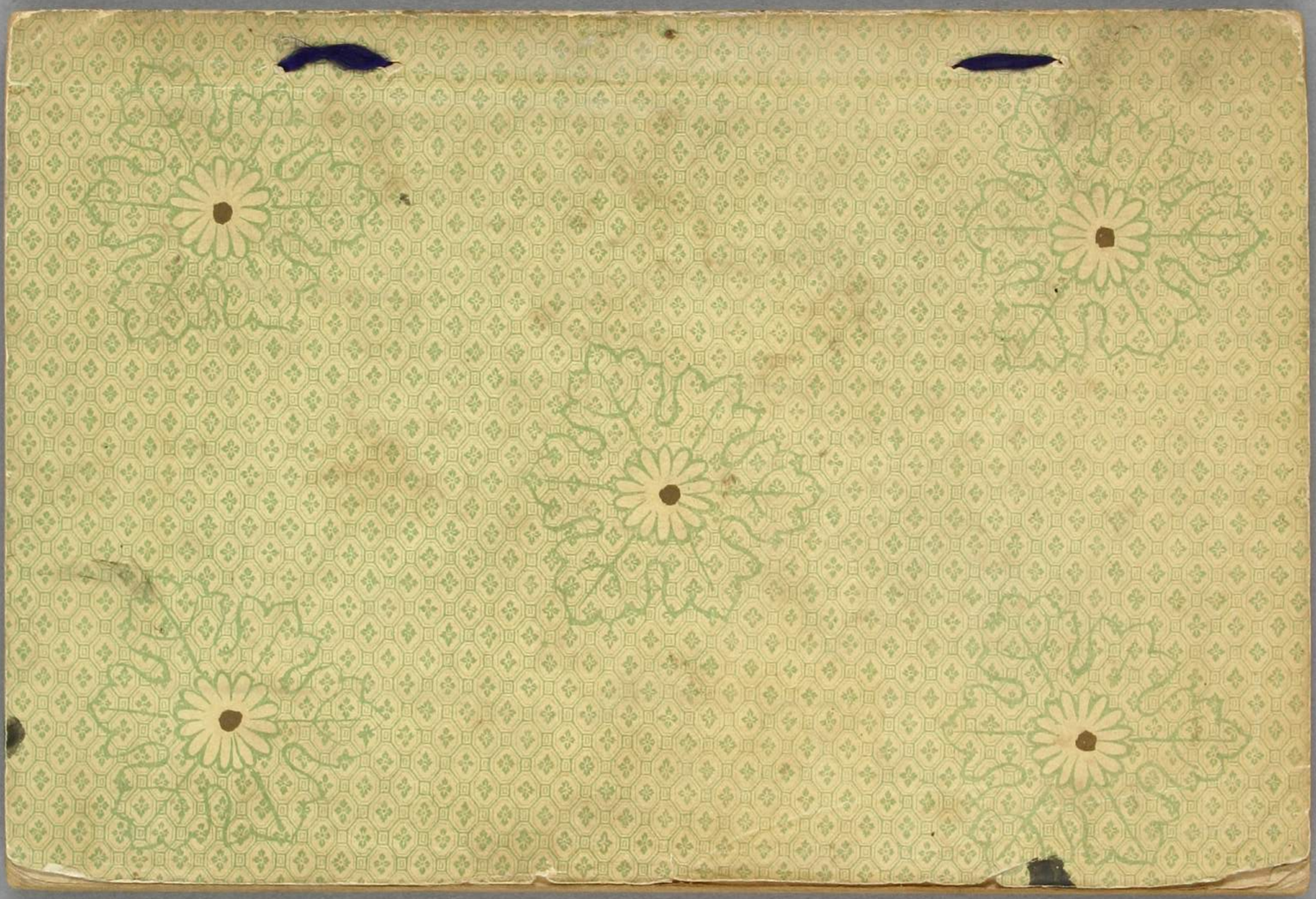
心

於

平

大和田建樹著

本間文庫
文庫 14
D 116



文庫14
D116

自序

わが歌をわが出版するは古來例かしといふ人もあれど西洋にはめづらしからぬことなりさりとて余はあながちに西洋を學ばんとにもあらず又例なしとて憚らんとにもあらず唯書肆の公にしては如何といふにまかせて詠草の下がきを與へたるのみ余が歌の拙なきは自ら知るところなれども之を好むの點に至りては世の上手たちに劣るべくもあらず幸にして此書を手にするの君子あらば

拙かしとてな慈愛の叱評を吝み給ひう

明治二十八年四月　建樹しるす

山したみづ

花をあるじの巻　明治十六年詠草

大和田建樹作

月前梅

たつもうし花を今宵のあるじにて月さへ宿る梅のこのもと

水邊霞

ひきのぼす舟のゆくへもたえ〳〵に霞ながるゝ淀の川づら

古戰場

駒とめし田づらいづことかへりみる額にさむき比良の山風

春曙

花のいろに霞むと見えし月影の空にわうるゝあけぼのゝ山

春雨

歸りくる花見車もいそぐなりかすみの末やあめとなるらん

春夜

鐘の音は霞のおくにふけそめて月影しづむしのばずの池

閣龍

大海に人のかよひぢかけそめし君やこのよのかづらきの神

讀書

讀む儘にゑらぬ事のみそひゆくを物しる爲に誰かよむらん

酒

けさい又手にもふれじと誓ひしをいつ盃のかずつもりけん

隣梅

をすのうちの琴のしらべもふきませて中垣こゆる梅の春風

庭花

野山にと思ひたちしい庭ざくらさかぬきのふの心なりけり

夕花

野をひろみかねの音する寺もあし心しづかに花にくらさん

月前花

櫻花あかぬ餘りにたをり來て月のかげさへかざしつるかな

花のころ上野にて

さえくれし松のあらしいかとかへて花にしづまる岡の春風

蛙

ほろ〳〵と柳花ちる山川のいかだのうへにかはづなくなり

雨の日上野にて

雪まじりふりくる雨にとる傘のしづくもにほふ花の木の下

月かもしろき夜墨田川に遊ぶ

さきつゞくつゝみの花のいろ見せて水上遠くにほふ月かげ
匂ひくる風をしるべにたちよれば雪の上より月ぞこぼるゝ
川舟の花よりほかの花をのせて月の夜ざくら見る人やたれ
　　まくら橋をわたる
行きくれて花の下ぶしせし人や橋にまくらの名は負せけん
　　花のもとに髑髏あり
おどろけば梢のいろにあらそひし花の姿もはるの夜のゆめ
　　遲日
今朝わけし梢もとほくなりにけり花の木陰に一ねぶりして
　　山吹
中垣のへだてばかりにゆひすてし庭の山吹はなさきにけり

ある夜

ほとゝぎすなく一聲にさめはけりふみを枕のうたゝねの夢
人々つどひて忠臣藏を題にてうたよみける時か
　　ほよの前を
いまだしる女の才のなか〳〵につまの身をきる劍ありとは
　　ふかるを
さしのばす鏡にうつる水莖の跡くらからぬ身とはしりきや
　　西安庸の母の一周忌に　夏懷舊
五月雨のふりし昔をしのぶらんしをれぬのべの夏草もなし
　　また　夜郭公
をちかへりいたくなきそ郭公きかでも袖のぬるゝ今宵を
　　水邊螢

二つ三つはし見えろむる水の上にそひゆく影や螢なるらん

五月雨

晴れなばとまちし川原の螢狩思ひもたねてふるひかずかな

蓮生法師

たをりつる若木の花の一本や蓮のうてなのしをりなるらん

菅公

つくしがた波まのかげいくもらぬを月の都い霧ふかくして

夏月

枯れ殘るいはまの水をいのちにてすむ影ひろし夏の夜の月

照り渡る日影をわびし言の葉の恥かしきまですめる月かな

夕蓮

はちすばのひろばがくれにさく花を時々見せて夕風ぞふく

八月十日國府臺に遊ぶ

寺守のきてもはらはぬ古塚にすゝきたむけて秋かせぞふく

海邊月

武藏の海すみゆく月の末見えてひとすぢくろきわはの遠山

安房の浦めぐりしける時

相摸潟雲こそかゝれわはの海のしほけの末や雨となるらん

うちよせし波の名殘とみる迄に磯のしらゆふ花さきにけり

江嶋にて

つたひこし磯ぢいたえて月影をよもにめぐらす神のしま山

嶋姫の秋のみけしやみつぐらんときていあらふ波の白木綿

薄

おなじ色に見えし夏野の草葉よりすゝき分れて秋風ぞ吹く

萩

こよみなきわぶ山ざとの袖垣よ萩ころ秋をしらせがほなれ

秋草花

七草の外よあはとといしらざりし庭のかまつか花咲きにけり

もちの夜雲おし

何ごとも心にたがふ世の中にすめばこよひの月もありけり

秋動物

わけまよふ露の末野い道さえてすゝきのおくに狐なくなり

十月廿日本居大平翁の五十年祭の會に　對月懐昔

其かみの秋の露をやかけつらんぬれぬたもとの月影もおし

小幡八重子の庭に菊あまたうゑたり

おきわたす露の光もいろ〳〵ににほひおくあるきくの花園

俊寛の能を

纜をときすてられて殘る身のうらみや舟にのりてゆくらん

夜菊

暗の夜もをりこそまさへふく風のしるべあまたの菊の花園

朝菊

月影い空にゐのれてわくる夜のかきねに殘るしらぎくの花

折紅葉

山風のゑらぬ先にとさをりつる袖にあやなくちる紅葉かな

寺落葉

あか井くむふもとの道いうづもれぬ御堂やいかに木枯の風

初雪

富士の嶺の物と眺めし白雪を今朝ゐゞの宿に見るぞうれしき

千鳥

漁りするあまのゐゞり火影瘠せて洲崎の月に千鳥なくなり

冬月

水鳥のさちゐひまなき池の面をきづかにめぐる冬のよの月

薄水

白鷺のおりゐる見ればしのばずの池い氷らぬ方もありけり

霰

ひとしきり烏を空にさわゞせて霰こぼるゝ木がくれのやど

時雨

山ざとの紅葉見ゝとてこし人をふり留めさる夕しぐれかな

年市見ありきて

いそがしき去はすの市の人心去らずがほにも梅かをるなり

いまいくゐ寢なばと春をまちゐびし昔戀しき年のくれかな

山みちの卷

明治十七年詠草

風前雪

つむじ風かさとられじとたゆたへば行手うしなふ雪の山道

二月ばかりおもふことありけるに

むすぼれし心の氷とけぬ身をよそになしてもきゆる雪かな

谷鶯

わけのぼる谷のほそみちつき消えて小笹がくれに鶯のなく

野霞

霞む日のなさけなさけりまよひいる野守のいはの花の一本
いつしかと野火のけむりの面影に立ちかはりたる朝霞かな
三月のはじめ近きあたりに火の災のありける跡
を見めぐりて
たち殘る木陰ばかりを命にて燒野のきゞす夜やあかすらん
春曙
花の雲鴈の羽風のほかにまたみそらの海にたつ波もなし
浦春月
磯山の花にくらして浦づたひ歸るとすれば月もいでにけり
ところ〴〵の花見めぐりける日
神田山まつの下風身にしみていがきにつもる花の、しらゆき
人のゆくすみだ川原をふみかへて龜戸の杜に花を見るかな

人に契りおきたるかへり事まつとて
れもへかしまつ身になさて山里の花のたよりの心ながさを
古戰場
ちりはてし若木の花のあとゝへば春風寒き須磨のふるてら
岡郭公
郭公なくや上野のをかつゞき月にかげさすまつばちもなし
深夜五月雨
うしみつの鐘は枕に音消えて五月雨すごく夜はふけにけり
雨晴
たつ鷺のもくへも見えて湊江のあし原つゞき雨晴れにけり
童のもて遊ぶ書卷のはしに
ふくれじと渡りあらろふ宇治川の波に急がぬ人もありけり

夏夕

夕立の雲かへりゆく山のはに殘る日影もすゞしかりけり

暑

笹のはもうごかぬ岡のいづかたよ風はかくれて夕待つらん

竹風夜涼

風ふけば竹の葉ごしの里見えて動くもすゞしともし火の影

漁火

玄まつとりねにゆく沖の洲崎よりうかびいでたる漁火の影

夏眺望

うゑはてし夕べに見れば垣つ田の早苗につゞく遠のまつ原

夕立のあらひすてたる青空にすゞしく殘るふじのとはやま

朝顔

うなゐ子が數へもらしゝ朝顔の花嬉しくも夜いあけにけり

秋雨

痩せのこる池のはちすに風見えて夕ぐれ寒くわたる雨かな

擣衣

道もなきすゝきぞくれの山ざとを月にしらせて衣うつなり

海邊秋

衣うつ音たえにけり浦のあまい月の夜汐やくみにいでけん

旅泊秋

みなとゐよおちくる鴈の聲ふけてかぢの枕に秋かぜぞふく

十一月二日上野の競馬を見て

まけばうらみかてばよろこぶ人々のきほふ心もあはれ一時

時雨

一さかりかへりざきする山梨の花にねたくもふる時雨かな

水鳥のさゑぐ羽音におどろけばまどうつ月の影しぐるなり

殘菊

さえ渡る霜夜の月にひとさかり心たかくもにほふきくかな

寒月照松

さえ渡るかれのゝ松の霜の上に影ほそりてもすめる月かな

虫聲幽

虫の音もあるかなきかになりにけり野分にあるゝ夕暮の庭

山路霧

あけぬとて宿はいでしを鈴鹿山夜を殘してもたてる霧かな

虫

夕風ゝまつの梢にゑづまりて虫になりゆくあきの野邊かな

秋曙

ゑのばずの汀はるかに雁おちて月影ゑらむあけぼのゝさと

田氷

ふみわけて小田にかりねる白鷺の跡よりとけてゆく氷かな

曉鐘

月影ゝゑらみもはてぬ山のはにあけぼのいそぐ鐘の音かな

鉢木の能を

折りたきし雪のしたある理木のけむり霞ゝて春ゝきにけり

宮詞

いつか又ゑらはの數にえらばれて花見車の御とものつかへん

雪晴るゝ

日影さすたかねの雪をあらためて谷間におろす松の朝風

海人

あま少女汐くみさしていそぐなり網引の船やいま歸るらん

風のてゝちにわづらひて少しおこたりがたにあ

りけるひまもなくまたつよりけれバ今い酒もや

めよと醫師のいふに

竹の葉のつゆの命も消ねぬべしまたさえかへる夜半の嵐に

名所冬

枯れ殘るすゝきのかげもすごき夜よ石濱づゝみ狐なくなり

古戰場

うきしづむあたもひとゝき石橋の山松が枝に秋かぜぞふく

名所春雨

かはちやく烟の末もうちしめり今戸づゝみにはる雨ぞふる

殘春

たちのこる霞もさびし墨田川はなよりのちのはるの夕ぐれ

春朝

二つ三つ霞がくれを飛ぶ雁のつばさに見ゆる朝ごちもなし

海邊霞

いろちかくかゝる干潟の舟かげを立ちへだてたる朝霞かな

春雨

月影もつま戸に去めるこゝちして雨になりぬる朧夜のそら

霞

雲間よりほしもちりくるこゝちして松の木陰をもる霞かな

春夕

白魚とるあまがしわざも見てゆかん月おもしろく霞む夕暮

四月十日母君の靈祭して　春懐舊

うちつれて遊ぶきゞすの聲きけば親ある身こそ羨ましけれ

梅

なか〳〵に閨もる風も嬉しきはたゞかりそめの梅の下ぶし

春眠

夢ぢとふうめがかならでうたゝねの枕にさはる春風もあし

春雨

夕ぐれのならひにまして柳原けむるとみれば春さめぞふる

閨怨

消えのこるまゝの火影も寒き夜に遠方人の寐ざめをぞ思ふ

梅

はしゐして琴とる人の面影もおぼろに見えて梅かをるなり

夕春雨

山ばたの麥生えめりてゆふひばりおちくる空に春雨のふる

遠山霞

武藏野の霞のまよりながむればおもかげのこる富士の遠山

蝶

柳原風うちねむるはるの日にいそがはしくもとぶ胡蝶かな

雲雀

風たえて花ぐもりせし大空にあがるひばりの聲ばかりして

淺草公園に遊びて

つらねゆく木陰の袖もいろそへて春風にほふ花のおくやま

靖國神社の花を見て

なき靈も身にくらべてやをしむらん嵐にたぐふ花のしら雪

四月廿五日朝のほど天氣よし

ちらぬまと風よりさきにいそぐらん花見車の音しきるなり

春のくれがた

散りはてし花のあとゝふ夕月のみどりに霞む影もしづけし

落花

朝寐ぐみけづる少女が袖の上に降りかゝりたる花のしら雪

相撲といふことを人のよめといふに

思ひきやかたんまけじのたゆたひよ揚る扇のよそならんとは

遠帆

浮きしづむいり日の空にたゞよひて帆影あやふき遠の海原

春遊

ともし火の花も吹き散る春風にゆきをめぐらす舞姫のそで

遲日

くれはてゝ思へば遠し岡づたひわけつくしたる花の面かげ

夏のはじめ向嶋を散歩して

かけ捨てし青葉がくれの篠すだれ風より外にまく人もなし

海棠

海棠の花のねがほもさめにけり露うちこぼす蝶の羽かせに

蛙

しめやかに池の蛙もなきいでゝ雨れもしろき夕ぐれのやど

首夏

やり水に龜もて遊ぶうなゐ子の袖あたらしく夏は來にけり

薄暮

星はまだ光れちこぬ松陰にほのめきいで〳〵ほたる飛ぶなり

水聲

えだかいす杉より奥は道もなしかすかに水の音ばかりして

撫子

おでしこの花の朝がほ露おもし戀しき人のおもかげにして

水邊夏

風渡るはすの若葉のひまとめてうかぶもすゞし夏山のかげ

神保町より飯田町の家にうつりすみける頃六月ばかり

さながらに身さへかへたる心地して松の上ゆく月を見る哉

おなじ月の廿九日つまの兄をうしなひてなげきにしづみをるに

さらでだにはす隙もなき五月雨の習ひに勝る袖をこそ思へ

忘れていあすもあいんと起臥の身に面影のはなれざるらん

初秋風

つりどのにあきづ釣り遊ぶうなゐ子の袂に見ゆる秋の初風

夏虫

浮草につばさやすむるかげろふの夢より秋の風やたつらん

盆まつりするとて

なきたまのかりねの枕露ちりてむかしに似たる秋風ぞふく

水鷄

みづたでの下葉涙こす夕風にかはしも遠くくひななくなり

美人

ふちかゝる髪のひまより匂ふなりまだゑみあへぬ花の朝顔

手枕のなごりあからむかはばせにこぼれてにほふ春の朝髪

水邊星

たつさぎのあともにごらぬ澤水にうかべる玉や夕づゝの影

曉星

山のはの星はすくなくなりにけり尾上の鐘を數へつるまに

水風夜涼

涼みすといでつる舟の苫莚うちれほふまでかぜふけにけり

あつき日かひ猫のいとよく眠りをるを見て

すゞあさく春の夢ぢに遊ぶらん心地よげにもねむる猫かな

蜩

松風はまだふとたてぬ日影より窓にふちくるひぐらしの聲

舟人の夢はさめゆく蘆かげに夕日うすれてひぐらしのなく

枕

旅人はまくらさだめんかたもなし峰の松かげ谷のかやはら

そらにたつ波の枕とたかくして影うちねむるあけがたの月

つまの兄君の四十九日にわれも謠を習はまほし

など常にいはれつるをおもひいでゝ

諸共にうたはん君とたのみしをよそに隔つるけふの悲しさ

いもうとの去づをの身まかりぬといふ電信きた

りける時

おもはえぬことの去らせに泊よりまづ亂るゝは心なりけり

きのふこそつまも兄君をうしなひしか今日また
かゝることとよとおもへばつまに
きのふかも君がぬぎつる藤衣身にきんものと思ひかけきや
またの日
世の中のおくを先だつことわりを見せても散るか森の下露
初雁
波の上に雁は來にけり藻塩焼く浦わの海人も秋や知るらん
梟
むかしたがすみし家居のあとならんあるじがほなる梟の聲
野露
うなゐ子が花をる顔もぬれにけり垣ねつゞきの野邊の朝露
橋

たつた姫けさ渡りつるあとならんみそらにかゝる霧の浮橋
秋夕
ひと時雨すぎつるまゝにくれにけり夕日みじかき冬の山里
秋寒きかた山里の夕ぐれにまたふとづれてゆくしぐれかな
秋風
山もとの火影あらはになりにけり稻葉をわたるよひの秋風
秋田
をぢがもる山田の引板におとづれて色ある風の渡る頃かな
秋獸
寺もりもつきにわくおれいでつらん御堂の廊に狐なくなり
秋螢
秋風にふきよせられてはなれすの蘆間とひとつゆく螢かな

秋色

なにとなく秋のけしきになりにけり薄はなだなる夕暮の空

秋晴

はれわたるみそらの末に冬ちかき色をみせたる富士の遠山

秋木

山雀のいつくひ行きし種ならん松のやどり木紅葉しにけり

晴れてゆくふもとの霧の波間より浮びいでたる松の村だち

殘月

去きみつむ山路をぐらき明ぼのに猶影のこすいりがたの月

薄

をれかへり招く垣ほのいと薄たがよの秋のなごりなるらん

霧

山寺の垣根は霧になりにけり花つむちごのみちまよふまで

朝露

このあさけをりこし柴にいろ見えて氷り初めたる月の下露

秋田家

あれはてし畔のやしろもとよとしの祭にもれぬ秋ぞ樂しき

名所秋

一夜ねてきくだにあるををしかなくさがの〻奥の明方の空

海邊望

雪とちり霧とくだけてたつ波にはれてはくもるをちの嶋山

社頭紅葉

神もさは心や千々にたぐふらん紅葉去がらむみたらしの水

月透簾

玉すだれひまもる月にゐび人も小琴のちりやうち拂ふらん

閑庭荻

いづかたに人はすむらん故郷はをぎふく風の音ばかりして

山里をとふ

人影はゆくへも去らず心あての琴の去らべを松にのこして

名所原

雲さわぐあなたや白くなりぬらん時雨身にしむ武藏野の原

樵夫歸月

眺めやるふもとは月になりにけり柴おひつれて山ぢ急がん

家ゑ月ごろかひならしつる猫の子いづちゆきけんかへらずして一日二夜になりぬ犬にやはまれけんわろものにやさらはれけんといとあはれに

もかなしくもおもひつゞけられて

朝夕に馴れつる物をゆくへなくはふらかしたるけふの悲しさ

いつのまに歸りきぬると手にとれば夢なりけりな鈴の響は

人ならば道をとひても歸らんをたゞ膝のへにけさは馴るらんかくて二日たちぬる朝ふとかへり來ぬうれしともうれし

今もなほ夢かとぞ思ふ二夜見しそのおもかげの心ならひにのちまたかへらずなりける頃妻の妹より首玉の料に紅のひもをぬひておこせければ

ぬひてよと君に頼みし昨日まで形見になさん物としりきや

二日三日たてどもおとづれなしこのたびいいたづらにみなしてんことよと思ふにいとかなし

いかなればかく睦びては馴れつらん契悲しき猫にもあるかな

五日六日にもなりぬはやかへらぬものにみおし
つればあはれといよのつねなり

今ぞ去る手がひのねこをうしおひて子に後れたる親の心を

冬　曙

あけはてばをちのたかねの雪を見ん曉寒くしぐれふるなり

冬　夕

すぎゆきしをぐれのあとに殘る日の影ものすごき峰の老松

冬　雨

柴ひろふ山ぢもぬるて谷陰のいほりわびしき冬のあめかな

冬　鳥

よびかはす田鶴の遠音もあはをなり雪かきくらす夕暮の空

冬　獸

少女子がひざの上さらぬ猫の子も同じ心にはるやまつらん

冬　木

秋姫の手おりにもれし松がえにたれくりかけし雪の白いと

冬　日

朝霜にうづもれはてし庭のおもを芝生にかへす日の力かな

冬　水

霜がれの草のなかゆくいさゝ水朝日にけむるいろも寒けし

蘆の花ふきちる風に波たちてこほらぬかたも寒けかりけり

冬　月

くまもなくふけわたるこそ淋しけれ落葉の後の霜の上の月

十一月廿三日飛鳥山のもみぢ見にゆきけるに道

までおひ來つる時雨のあともみねざりしかば
木陰には我こそさきにとひきつれ時雨と共に家はいでしを
とて酒のむほどにふりいでぬ
この頃の空とゑる〳〵わびしきは紅葉しぐる〻木々の下陰
そめのこす枝に惠の村時雨よのまにふらば嬉しからましを
東京大學のたかとのより富士の山さはる影なく
みわたさる〻を日毎に我出仕する編輯所の窓よ
りうちむかふにさま〴〵にかはるけしきもおも
しろければ
そのかみのおもかげ見せて今もなほ烟にまがふみねの白雲
富士のねは戀しき人に似たるかな影みせそめて又隱れつ〻
くもりなき日影にはぢて山姫は霞のたもとうちかざしけん

簑とれはひ笠とかづきて旅姿くもによそほふ富士のたか山
富士の嶺は神代の雪のけぬが上に幾積りして年はへにけん
富士の嶺のはだへは殘る色もなしきつるやいく〻へ雪の毛衣
旅人をおなじ高嶺にわふぐせて雪うちはる〻あづまぢの空

枯野

朝月夜しかのふしどもあらはれて枯野の尾花霜にふすなり

旅泊

夜もすがら波にゆられてかぢ枕さしいる月の影もさだめず
うき沈み波よゑたがふ帆ばしらの月影高く夜は更けにけり

氷

里の子がうつや川瀬の石つぶてまろがる見ゑば氷しにけり

冬椿

鶺鴒なく山ふところの夕日影春めくえだにつばきさくなり

五年ばかりさきにながくやぢりてありける家のあたりをすぐるとて秋のくれがたに

今はたが文よむ窓をたゝくらん軒ばのいてふ風にちるなり

水鳥

池水をかくす落葉の風の上にうきすたづねて鴨ぞなくなる

橋渡る子らにもなれて日影よき池のをし鳥たちもさわかず

社

三輪の山むかしながらの杉ぶ枝にかゝれる月や神の面かげ

青山元をとひける夜家づとに前栽の花を乞ひければ下男どもよびいでゝその枝この枝と蠟燭もちなぶらいひつくるをみて

菊はさかり椿はつぼみとりぐに花も姿をかへてこそみめ

冬眺望

木がらしのふき殘したる松一木けむりて月の影ふけにけり

名所雪

すみだ川水上遠くゆきはれて夕日をかへすをつくばのやま

歳の暮の心を人々の境界になりてよめる

少女

鞠もおつ春の小袖もぬいをへつゝあすまつ外に樂しみぞなき

書生

たらちねの贈りしまゝの旅衣ほころびながら年もくれけり

老人

明暮につまぐる數珠の糸たえて殘り少なくなれるとしかな

商　人

をしと思ふいとまもあらじ西東あしをそらなる年のいち人

貴　人

九重にとしのよごともまをしきぬ心ゑづかに春やまたまし

貧　家

ふる雪の綿にもがなや妻に子に寒からずだに年をこさせん

法　師

墨染のそでも市路にまじるなり春のたむけの花かはんとて

茶道をむねとする人の八十の賀に

くみいるゝ釜のゑみづも ゑらぶらん君が千とせの松風の聲

一月一日の朝

ゆく年を送りしかめの酒ながら心あらたにゑへるけふかな

新年朝

待ちつけて向ふむづきの朝空に翅をのべて田鶴ぞなくなる

舞

散れば舞ひまへばこぼして舞姫のすゞたにならふ花のしら雪

冬　旅

わびしさを語りあふこそ楽しけれけふわが越ねし雪の山道

山殘雪

舞ふつるのつばさにかくれあらはれて一峯しろき春の遠山

走女

一花をたれに見せんとをみなべし霜より後に水かゞみする

盃

花の色にかすみもゐひぬさは姫いつきの盃そらにさすらん

夕霞

かへり見るつゝみの日影霞むなりなごりさびしき花の夕暮

春曉月

柴人のあかつきおきの袖の上に花のかげれとす山のはの月

名所松

天少女けふもおりゐてゑらぶらん琴のねおくる三保の浦風

風前落花

塞からぬ雪ふき入れて川舟のすだれにそよぐ花のゑたかせ

首夏月

藤のはなこぼるゝ水を吹く風に晴れ曇りする月もゑづけし

蚕

桑の葉をこにかふ宿の明暮い晴れてもあめの音ばかりして

夏花

五月雨のはれ間に見ればかきやりし池の浮草花さきにけり

湊雨

舟人のともよぶこゑもわはれなり湊入江のあめのゆふぐれ

水邊郭公

水車ひゞきもたゐてふくる夜の小川の月になくほとゝぎす

瀬をはやみ月もくだくる谷川に一こゑまじる山ほとゝぎす

雲

筆取りて畫がきし人の影もなしいり日のあとの雲の山の端
龍と臥し虎とをどりてたつ雲もかへれば峰の花のおもかげ

螢

山川に流れかゝれるふる卒都婆照して一つとぶほたるかな

述懷

思ふ事ならぬといひてなげかじよ思はぬ事のなるは多きに

橋納涼

夕風いわれよりさきよわたりけさゞ波こゆる谷の板ばし
暑さをばいくへの底に忘をきて雲の上ふむ木曾のかけはし

樂未央

幾夜ねて千里のはかの月を見んけふぞはなるゝ日の本の海
明くるまで月にのまんとれもふまに瓢もたせて友も來にけり

小幡八重子のはつうぶやをいはひてきぬなどお
くりつかはすとて

またれつるたづの一聲きゝしより空の心もはれわたるらん

山家暮秋

散りまがふ紅葉のおくに殘さるゝ山里さびしあきの夕ぐを

つゞみ

月ならできく人もなき海づらに波のつゞみの聲ぞふけゆく

水邊秋風

うすをゆく波の日影をかたよせてひとすぢわたる秋の夕風

菊

うちあそぶ鞠のゆくへも心せよ學びのまゞの菊咲きにけり

水邊落葉

散り來ていまた流れゆくもみぢ葉に汀の夕日浮ぶ間もなし

旅　曉

霜の上にまだたび人の跡もおし月とふたりの山ごゑのみち

海邊冬月

いかづちの聲はえづまる波の上にゑがは寒けく浮ぶ月かな

美しきもの

鳥もまだけさは跡つけぬ霜の上にこぼれて匂ふ山茶花の花

水邊寒月

木枯に落葉かたよる池水をさむげにのぞくつきのかげかな

冬　鳥

いく度か時雨をさろふ山風にこずゑのからす夢もつゞかず

ちごのもて遊びものいるゝ箱のふたに

ふく風にまかせてめぐる風車おひたつ末のをしへともみよ

氷

やり水にかけしうなゐの水車めぐらずなりて冬ふけにけり

霰

くち殘る池の紅葉にまろびては波に消ゐゆく玉あられかな

冬　夕

雲間もるほしの光も身よぞえむ晴れゆく雪の夕ぐれのそら

車

風車ひとりひまなくめぐるなりねむりえづけきちごの枕に

童

いつのまにのり習ひけん物學ぶ外にひとつの竹うまのミち

冬花

谷深くしぐれの雲よおくられて歸りざきする花を見るかな

雪中眺望

うづもれぬ煙ばかりを都にて雪にとなりのをちの富士の嶺

初春

まだ寒き朝日の影も何となくかすむや春の去るしなるらん

夕陽

こがね色のたつを波路にをぢらせて夕日ちかづく遠の嶋山

寒樹

おほかみのほゆるやいづこ冬枯の林にすごく月ぞさゆゆく

山

おもしろや烟のかむり雲のかぴいつもよそほふ那須の高山

川

水飲みにおりくる鹿の影みゑて谷川しろくきり晴れよけり

蜂

吸ひさしてけさわかれつる花もなし風ころ蜂の恨なりけを

水邊若草

ながれよる蘆のふる根をよすがにてひとむら青む春の若草

母君の靈祭をけるる日

父母のひざにたはるゝ嬰兒を見るにつけても君をしぞ思ふ

君まつるやどのこずゑに鶯も春の去らべをたむけてやなく

四月八日池の端より上野を見やりて

おもかげの外にゝ花のいろもなし春雨かすむ夕ぐれのそら

雲雀

うちかすむ野寺の塔のそら高く思ひわがりてゐく雲雀かな

村夜

旅人をのせこしうまもまじるなり月おぼろなる村の細みち

朝歸雁

紅の雲につばさをかすませてわさぐらたかく雁歸るなり

水邊花

水しろくきしみどりなるたにかげを春になしたる山櫻かな

猿

奥山にこのみひろひし猿の子を誰教へてか舞はせそめけん

六月のはじめ市谷のおくの家にうつりて

歸り來てむかふ垣根の花茨ゑみてぞことばかはしがはなる

夏草の葉に置く露もわがものと思へゞ玉のこゝちのみして

なべてさく花のいろかも我宿に見る時ばかり樂しきゝなし

相摸の旅よりかへりける夜

三崎がた波こぎわたるつり舟のなほ浮きしづむ手枕のゆめ

兵士

故郷の親子のかほも忘れけりいくさのにはのかちどきの聲

水邊夏

咲きかゝる池の畫顔靡かせてまこもがくれに魚のひれふる

木曾路の日記の中に

おもかげにあすゝ玄のばんわぎも子が宿の垣根の朝顔の花

嬰兒もちゝのゆくへや慕ふらんろの面影の見ゆる夜半かな

くちつもるかばねにふひしたねならん川中嶋の秋草の花
谷川の音より外に友もなしやまた山のあけくれのそら
いづかたをなつかこゐけん木曾の山桔梗さく野に鶯のなく
花のなき草葉もぬれて夕立の雨かうばしき木曾のやまみち
村雨の木々うつ音も神さびて夕ぐれすごき木曾のやまごゐ

馬籠峠をこゐはてける朝

あすよりハ誰をふくらん朝夕のたもとになれし木曾の山風

九年へて母君の御墓にまうづ

何事をまづまうさんと膝をれば聲なき木の葉袖にこぼるゝ

をとゞしうせける妹のはかをはじめてとふ

いつしかと待たれし兄ハ歸りしをもの言ひたげの石の姿や
君がためなかん物とハ昨日まで思はざりしをあはれ世の中

寒燈

見し夢の花のいろかもうつるなり霰ふる夜のともし火の影

旅衣の卷　明治廿一年詠草

三月の末つかた安房の旅しけるをはりに北條に
やどりてそこより富山に登るミちにて

旅衣ぬれとほりてもたのしきハ春雨けむる小田のはそみち

山にハ花もあまたはころびたり

山がつがけさまだわけぬ谷陰に獨ぞほゝゑむ花を見るかな
よそめにハ道もなかりし高山に登ればやすむ陰ハありけり

やぶりに歸りてあすい家にとおもへば

夢にのみ通ひなれたる我宿もこよひばかりになれる旅かな

あすの夜い千里のよそとなりぬべし枕よ通ふうら波のこゑ

夏花

川せみのすぎにしかたに風すぎて汀のひしの花なびくなり

夏月

風わたる青田のいねの波のうへを心ゑづかにわたる月かな

故郷松

松ひと木たてるを見れば故郷の野邊も昔のかげはありけり

山路

旅人のこゑふくれたる山みちに殘る日影やつゆのもみぢ葉

夕立

うなゐ子がうかべし池の木の葉舟ゆくへあやふき夕立の雨

夏朝

身をやかん物とも云らず朝雲をいろどりそむる夏の日の影

川風

よきほどに波ふきたてゝちりうかぶ花の上ゆくはるの川風

閑居夏

文車を風入るまどにひきすゑて夏の日ぐらしふみと遊ばん

森蟬

消ゆ殘る日いまだあかき松が枝に涼しくかはる蟬の聲かな

田舍月

くれにけり豆の花さく山里のかきねゑづかに月もやどりて

ゑづのめもいとくり車ひきやめて月に心のむかふ夜半かな

わがやどを高嶺の松の下かげに去ばしかくして登る月かな

女郎花

をみなべし花さく頃い何となき山下みづのいろもなつかし

秋田

神まつる里も見ねけり秋風に稻穗たれふす小田のをちかた

烏

夕風のふきかたよするもみぢばにみだれて一つゆく烏かな

近きわたりをよる散歩して

わけゆけば稻葉の露もこぼれ來て月影かをる小田の細道

虫のねも遠く聞ていねの上を月おもしろくわたる宵かな

小兒の百日せきにてわづらひける頃

あはれさよ吐けば又飲み飲めば吐くちゝと命のちごの起臥

我膝に頭もたせてうち眠るちごのおもゝのかくも痩せつる

さとしてもまだきゝ去らぬ嬰兒に藥のまする親のくるしさ

なくやよき眠るやよきと樣々に思ひみだるゝおきふしの床

なきたてゝほしがる物を與へ得ぬ父こそ先は悲しかりけれ

おほりなば菓子も木實もとらすべし今暫くを泣くな我子よ

昨日よりまみもたゆげに見ゆるかな昇れる熱や幾度おるらん

花園にむかふゑがほはかはらねど今朝はふりたつ勢もなし

謠ひつゝ蝶とくるひて舞ふ樣を一日も早く見んよしもがな

秋夕

黄ばみゆくいり日のあとの横雲に風の色さへ見ゆる秋かな

春雨

羽ふれて渡るつばめのあとの波消えぬと見れば春雨ぞふる

庭

秋風にまかせはてたるわが庭はこぼるゝ種の數もさだめず

陸前の松嶋に船遊びせし時

罪なくて今日ころみつれ松嶋や小嶋にかゝるゆふあみの色

世にたらぬ歎もあらじ浦のあまは波の入日を庭ようかめて

かへる舟あれもをしむかをちこちの松よ殘れる夕波のこゑ

古城

いちごつむ子のあしがけとなりにけり苔も幾重の城の石垣

風ひとゝいくさの聲をきらぶなり月をあるじの城の高ゐの

病みつかれたるちごをつれて箱根にゆく

みちにて

ちごの上に比べてゞ見る秋の雨にきをれて立てる花の笑顔を

箱根山わけいる袖にかつるなり神のめぐみのまつの下つゆ

かくばかり親もゝが身を思ひけん子ゆゑに登る箱根路の空

妻はつたびなりければ

もの毎にまだみもきらぬ旅の空けふこそ君が神代なりけれ

箱根塔の澤の一の湯といふにやどりゐて

筆とりて雨きく外に事もおし妻子い寢たりゝれもいざねん

嬉しくも天地ひろくなりにけりかやなき里のともし火の下

れもしろや歌思ひつゝまろびふすまくらに落つる軒の山影

あなたのしねむりうみさる枕には酒も殘れりちごも笑へり

雨雲を谷間のものとなしはてゝとよさかのぼる天つ日の影

湯あみしてうちふす窓のきづけさを音づれ顔に秋風ぞふく

大磯にて

箱根山くもゐる峰をあとにみてなみのおとときく大磯のさと

片瀬にて

江の嶋のともし火青く暮れはて〻片瀬におつる夜嵐のこゑ

七里が濱をすぎて鎌倉にかゝる

うちつれて鯛つる舟もかへるなり秋かせひろき鎌倉のうみ

をれかへる波をかすめてとぶ鳥の翼にさはる嶋かげもなし

暮春

山窓のかへでの若葉あめみえて春さびしくもあれる頃かな

蝶

露のうへにうまれし蝶の影みえてかすみそめたる有明の月

星

軒ちかくなぶる〻星の影青し寢ざめやいかにをちかたの空

樵夫

こりためて背負ふ眞柴に雪白し酒あたゝめて嫗や待つらん

秋風

せきれいのおりゐる岩に秋ふけて川ぞひやあぎ夕風ぞふく

春月

旅人もいそがぬ春の夕ぐれを月になしたる小夜のなかやま

あすこゐん木曾の山ぢの杉の上に霞みてかゝる春の夜の月

鐘

くれのこる紅葉のおくのふもと寺鐘も名殘になれる秋かな

落花多

古寺の軒のやどり木はるふけてはらはぬ花の雪ぞかゝる

苔

まださめぬ眠り寒けきふるづかの苔の衣にはるさめぞふる

秋朝

雁渡る朝日の前のくもの波まづおもしろし野にやくらさん

海月

荒波のいくへの底にゑづみたる舟のあとゝふあけがたの月

露

山の井はちる露しげし水かゞみうつす少女の影もみだれて

雨後花

春雨のなごりのいろにてりかへす夕日うれしき峯のはつ花

雲雀

きかばやな春は野守に身をなしてかつる雲雀の夕暮のこゑ

磯波

磯寺のはかげ寒けくふくる夜にいはこす波の聲ばかりして

驛路春

旅人を山路はるかにおくり來て花あるやどにかすむ月かげ

春のうた

庭鳥のゑづが軒ばにときつくる聲あたゝかに霞むそらかな

西川かめ子の北海道より文おこせたるか

へりごとのおくに

面影に君もそひつゝうかぶなりねゞが千嶋の波のうへの月

露ながら花のひとねだ折りもちてたてるは君か窓の火影に

秋雨

あすさかん菊のつぼみもかずそひて雨たのもしき夕暮の庭

人の八十の賀に

君ならでそのゆく末いたれかみん庭の鶴龜のきのまつたけ

暮春鳥

たがためにきゞすの聲の殘るらん花にゐかれし夕ぐれの山

暮春水

山吹のゐげもまばらになりにけゐくまでいくかの庵の苦水

母君の靈祭しける日春風を

雪まよりゐたりそめたる春風のこゝろを花の上に見るかな

なきたまの名殘さびしきふゝの上に袖ふれてゆく花の春風

一日遊びくらしてかへりける又の夜

こよひまた誰とか見まし山寺の若葉さびしくかすむ月かげ

和歌山よ長く逗留して人々のなさけをうけゐたるが高野山にのぼるにつけても途中の用意やゞるべき僧房の紹介などさま〳〵に心をつくしてあたへられければ

けふゐけん高野の奥の雲よりも深きい人のなさけなりけり

忘れじよ友のなさけに送られて旅立つけふのあけぼのゝ空

高野山にて

雲に入る杉より上にひゞくなりたかのゝ奥のひぐらしの聲

男郎花あまた咲きいでたるに女郎花い一花もゝえず

女郎花にはぬ山のあき風にところえがほの花のいろかな

夜あけて霧ふかし

名もしらぬ花をちこちに見えそめて朝霧晴るゝてらの中道

和歌山にていしば〳〵和歌の浦にしほあゝにゆ

きけるがいつのをりにかありけん

又もこんかた葉の蘆のゆふ風にこゑうちそふるまつの下陰

隔てなき遊びがたきとなりよけり昨日いよその和歌の浦波

別るとても夢路に通へいにしへのあとなつかしき和歌の浦波

鳴瀧といふに遊びけるに夏ながら紅葉いさゝか

色づきたり

瀧の音に夏もゝすれて山寺の庭のもゝぢばまだきそめけん

和歌山城にのぼりける時

まだそめぬ蔦の色さへわはれにて夏も身にしむ志ろの松風

日前國懸の両宮にまうでゝ

鷺の聲そらにきこえて日の影も神さびゝたるもりの竹むら

ゝか山にて人々あつめて歌の會しける夜

池といふ題を

池水にうかぶやなぎの一葉舟それだにとまる浦いありけり

また初秋雲を

秋風いまだ身に落ちぬ夕ぐれを空にいろどるみねのよこ雲

また初秋花と

志ばしとて夏をのがれし山寺のかきねの月に萩を見るかな

和歌山をいでたつに人々みちまでれくり

來て涙うかむるもあり

人々のふかきなさけをゝが袖にあつめて絞るあけぼのゝ道

すみなをし方いかなたとみかへれば涙にかすむ和歌山の城

吉野山にやどる

來てみればまとるうき世のちりもなし吉野の山の夕暮の空

なほいかに花の雪ちる朧夜のそのしたかげの旅寢なりせば

西行庵といふあたりに苔しみづのあとあり

あお戀しての苔水をむすびあげて筆ぬらしけんひとの面影

後醍醐天皇の陵ハ如意輪寺の奥にあり

古寺のかけひのしみづおとすみてみさゞきさむし秋の初風

櫻の葉をつゝみて妻のもとへ

面影にあらしの色をおもひやれ筆もおよばぬみよしのゝ山

また人のもとへ

夢にだにこよひいかよへ吉野山木の間の月に語りあかさん

多武峯さしゆくみちにて夕立にあふ

あきづとぶみちのなでしこ露みゐて名殘しづけき夕立の雨

長谷寺にまうづ

わが身さへ佛さびてもみゆるかなまつ風かをる長谷の古寺

いつかはと思ひ渡りし初瀬山登るもしるべ世々のことばの

三輪の神社を拜む

面影の夢もこよひいかはるべしけふぞわけつる三輪の杉村

畝傍山の東南の陵にまうでゝ

御とらしになれししらべか玉だすきうねびの山の松風の聲

奈良にやどる月清し

もろこしに昔の人のながめけんこれや三笠の山のはのつき

元明元正ふたみよのみさゞきにて

もゝしきにつゞくゆめぢの跡もなし稲葉を渡るあはの山風

聖武天皇のみさゞきにて

佐保の山くさばしづけし古寺のかねに千年のこゑを殘して

よしのをいでしより木津につきける日ま

で日毎に夕立にあへるもうれし

山めぐりわがゆくかたに慕ひ來てしたしくありぬ夕立の雨

木津の龜岡氏に宿りしに酒いたくしひられて

わけきつるあとを都になしてみん夢ふきれくれ木津の川風

てゝより京都の空へさはりなく見ゆ

あすへゐが袂の雨となりぬべしあたごのゝねの夕ぐれの雲

また

うちむかふ故郷人のおもかげをゝそらにゑがく雲の色かな

みかへれば三笠山もいとちかし

三笠山月にむかしのあとゝへばあらしにひゞく古寺のかね

大原の寂光院にて

御幸せしおぼろのしゝづ影たえて咲き散る花の春やいく春

三條の家にやどりけるに三階なればゝゐ

たされぬ所もなし

東山ともし火あをくまたゝきてまくらになるゝ加茂の川風

四條のすゞみよりかへる〈

燈火の影をはなれて休らへば比叡のねおろし袖に吹くなり

あらし山にて

大井川たえしゝゆきのあと問へば聲せぬ波にまつ風ぞ吹く

いく人の花にいとひし末ならんつゆふきおとす嵯峨の山風

法輪寺にて

片折戸鎖し捨てたるあともあしいづくの松かしらべ傳へし

ほとゝぎすといふ茶屋にて酒のみたるほどに雨ふりく

あらし山つきぬ名殘をふくるとや雨に姿をかへてたつらん

ぬれながら野の宮にまうづ

我のみと思ひしものを野の宮の黒木のとりゐ雨もとひけり

東山の大文字火ともす夜にわへるもうをし

世の中のすがたを見せて山のはよたがかきそめしもじの燈

攝津の住吉にまうづ

我ためゝねぎごともせじ神よたゞ汀の松を千代にからすな

家人にいつかきかせんすみよしの松に吹らぶる神風のこゑ

大坂をたつまへの日明石氏にまねかれて

櫻の宮よすゞみよゆく

蓮かをる櫻のみやのゆふ風も雪井のよそにわすいしのばん

十一年あはざりし堀江のをば君をとひて大坂に

てまみえまゐらすまことにゐが母上の御はらか

らは九人もおはせしを今いたゞこの君ひとりに

おりたまへるもかおしきにつけておつかしうも

のがたりし給ふおど夢のやうなり

十年へて君にあひ見し嬉しさを歸りてつげん母のおはさば

母上の病ませ給ひしはきのふとおもひしをとて

そのをりのことなどかたりいで給ひければ

ともし火もなみだをそへておき君の昔語をこよひ聞くらん

岐阜にやどりて長良川の鵜飼をミる

あすまでのあゆの命も隣れなり波に消えゆくかゞり火の影

家づとにもてこし住吉人形を飯田大人に

おくりまゐらするとて

住みなれし松の木影を立ちいでゝとひよる千代の宿ゝ此宿

和歌山い大水にて家なゞれ人ふぼれなどせし事

おびたゞしといへばいそぎそのあたりの人とと

ぶらふとて

きのふまで心ゆるして涼み舟うかべしものをゐかの川みづ

人と向嶋の秋草見に行きける歸るさに

又いつか君とながめんすゝだ川ゝなかゝけむる夕暮のあめ

九日はもちの夜に當れり一家をあつめて歌よま

んと題さぐりなどしたれど心なき桂男ゝ顔見せ

んともせずしてやゝぬ

月やいづこみぢゝぬ玉の心地してすゝきをつたふ雨の下露

山家月

里人がいたゞく柴やおくるらんふぼ原山のありあけのつき

河月

大井川やどる月こそしづかなれかめのを山にまくら定めて

武田みつぎ子のはじめて子をえつるまもなく失

なひけるをとぶらふとて

身ひとつに秋のあはれや集むらん露をみしよの面影にして

くらべみよあはれゆふべの一嵐さきあへぬ花の色も殘さず

九月十一日の夜ゝ一夜あれあかして又の日の夕

方に至りて全くしづまりぬ雲の色星の影心地よき秋の景色になりにけり

日ぐらしもきのふの陰やたづぬらん野分のあとの夕暮の庭

根ながらの花のゆくへもあはれなり野分のあとの夕暮の庭

此頃倹約玉と名づけて金たくはふる土器の世に行なわるゝを家のものどもに分ちつゝそれ〳〵に書きつけける

かきあつめかきあつめなば高砂の松の落葉も山とならまし

火にたかば賤が夜寒を凌ぐべし拂ひなすてそ庭のもゝぢ葉

末つひにそのまゝにてや止みぬべき谷の小川も峰の小松も

秋風

柴ゝひてかへる谷まの丸木ばしゑもみえそめて秋風ぞふく

秋夕

鹿の聲たゞこゝもとの心地してゆふ日にちかき秋の山のは

秋田

ふもと田ゝあきおもしろし神山の祭のつゞみ聲もとゞろゝ

秋山家

水車紅葉のをちにひゞくなりこのみなかみやたづねこし宿

秋山寺

御あかしは月にまかせて苔みづをやがてあか井の秋の古寺

秋水

これも又ゆたけき秋のこゑならし月にすみゆく小田の落水

秋花

信濃路やかた山そばの花のうへに夕風しろく秋ふけにけり

秋鳥

八幡山めぐみにもれぬ秋なれやおほぞら廣くむれわたる鳥

秋獸

もみぢ葉をかたしきをれば熊野路や枕動かすおほかみの聲

秋旅

急ぐずはくれん山ぢの麓寺こゝのもみぢも過ぎうかりけり

秋朝

萩の花ちりしく庭の朝じめりをしかの跡のまじらましかば

人のもとに

今もなほおもへば戀し七草の花さくやどのゆふぐれのいろ

今年の夏必ずよ來ませ行かんと契りわひたる言の葉いかれずながらいさゝかの事のゆき違ひよりもとの心をえはたさでゐれい京都より直に歸ることゝなりぬその人い丹後の瀨田しげ子にて夏の休みに歸鄉したればなりかくて休みもはて歸り來ぬるすないち幾度もとひ來てそのねんごろに待ちまうけたるさまを述べつゝかくまでに人の心を勞せしめ給ひしとて言葉にふみに恨まるゝも今更ことゐりにてかつい面目なけれどいかゞいせんされどあやにくとひ來る日いいつも留守にてえあいでのみ過ぎつるに十月十七日いとまあるをりにとひ來たればのどかゞ物語して互の心にくまものこさずなりぬるこそうをしけれさて歸りてのちいひやる

むつましくあひて語れば夢ぞかし君恨みけんゐれも恨みし
くらべみよ短かく過ぎし夢よりもまだみぬ里のあすの面影

ある夜空晴れたり

秋風やはしの光をみぞくらんつゆとしもとの中ぞらにして

十月の末市谷より小石川に家をうつしけるがおのれゝ例の學校にいでゝ十一時までをしへてまだ人々ゝあるならんともとの家にかへりて見ればはや門もとざしすてゝ移れるよしのはり紙を殘せり何となうあわれにて

けさまでもすがりなれたるなか柱ぬし戀しげに秋風ぞふく
送られてけさはいでゝる我宿をたち歸りみればあはき故郷
又すまん人のなさけにかゝれかしほりのこされし庭の秋草

朝落葉

朝菜つみ歸る少女のそばづたひ猶捨て難く散る木の葉かな

夜時雨

衣うつ宿のともし火うちあびきひとむら時雨松にふるなり

名所紅葉

竜田彦あきの御けしや急ぐらん夜のまの露をおゐ姫にして

初冬雨

集めこし夕べの木の葉火にたきて藁屋の軒の雨を聞くかな

小山田に落穂ついばむ村鳥のゆくへしぐれて冬ゝ來にけり

風前冬月

しぐれくる木の葉の雨のひま毎に笛の音凄く月ふけにけり

夕眺望

夕霧に見ゆる限いつゝまれてまづそでぬるゝあすの山ごえ

橋霜

藤かづら結びすてたる橋の上に木の葉をとゞてゐける夕霜

十一月廿二日赤坂離宮の御苑の菊を拜觀して

わがそでにかゝらんものと思ひきや雲井の庭の菊の上の露

花のさまいろ〳〵にて目もあやなり

翁とてゑびやはをらんと舞ひいでし姿もまじるゆきの白菊

あしたづの翅かはして群れゐるは八千代捧げし歸さなるらん

なほ奥ふかくいるまゝに

わたりこしそれや紅葉のはしならん星の林に我は來にけり

薄くこき梢の秋をとり〳〵に捨てじと君やみそなはすらん

井

もみぢ葉をかきわけ見るゝば山の井の底にも月の影ぞ殘れる

朽ちのこる柳をやゞて井筒にて水にことたる水かげのいはゝ

わが女生徒のものしける廿七番歌合を判

しをはりておくに

秋の野の萩をみなべしいづかたに心よせてか露いおくらん

冬山

南より梅さくまどに雪ながら去たしくむかふゆふぐれの山

冬野

女郎花さく夕ぐれの月かげにうづらきゝしも此野なりしを

冬川

氷りゐしもミぢを瀬々にあそばせて朝日にけむる里川の水

冬里

新嘗のまつりいはゝぬやどもおし冬あたゝかにかすむ村里

冬寺

おのづから霜にひゞくもあはれなり秋はむかしの古寺の鐘

冬獸

わけまよふ雪の山路の夕まぐれ子を思ふ熊の聲もきこえて

冬鳥

いかばかり今朝は木の葉の積りけん軒ふむ鳥の音も聞ねず

冬旅

ふるさとの火影にきかばさはいかに霜ふむ山の木枯のこゑ

冬花

木のめつむ春の宇治人去るやいかに花おもしろき霜枯の山

冬眺望

やせはてゝ今は見るべき影もなしこれや若葉の夏の山のは

閑居落葉

うなゐ子が雀網はる柴の戸にまづ聲たてゝ散る木の葉かな

松さむく殘れる山をとなりにてあめに落葉を聞く夕べかな

冬暖

里川や氷ながらゝ岩かげにねむれるさぎのゆめもさゞけし

おち葉やく烟のすゑの寺山にはなを手向くる媼もありけり

鹿

ものたらぬすみかと人やおもふらん月面白く鹿の鳴く夜を

椎の實のこぼるゝ廊にあとつけて鹿のみなるゝみねの古寺

紅葉

みしめひく森の宿り木秋ふけて神代ながらの紅葉しにけり

鷲のゐるいはほかすめてふく風に谷陰くらくちる紅葉かな

朝

朝風にたもと吹かせて露ふめば今おきかへる花もありけり

世の中をかくても常にわたらばや朝びらきする舟歌のこゑ

冬　月

谷陰のいはまのつらゝつたひゆく月にはひゞく山彦もなし

はじめてゆやの能をせし時それに用ひた

る短冊に書きつけゝる

あづまぢにいそぐたびねの草枕ぬれてもはるゝわが心かな

十二月廿四日鈴本まる子がしばしとて福

嶋に歸國するに

朝しものとけぬさきにといろがずは雪にやならん白川の關

霜

さながらに夕月寒く暮れにけりわがふみろめし野路の朝霜

歳暮祝

うづみ火にゑがはあつめて一年の夢がたりする夕暮のやど

三十一日の夜にもなりぬ一年の面影一つ

のむねにあつまる

春風に袂ふかせてかまくらのむかしとひしもあはれひと夢

梨のはなこぼるゝ水に鏡して歌ふもひしもあはれひとゆめ

菜種さく畑づたひしてちごとゞの土筆摘みしもあはれ一夢

わか葉さす細谷川のかぼろ夜に蛙聞きしもあはれひとゆめ

和歌の浦の波にあつさをあらはせて貝拾ひしもあはれ一夢

まくらふく高野のたくの夜嵐を友となをしもあはれひと夢

春日山みどゝ寒けき神垣にかの子よびしもあはれひとゆめ
ひぐらしの外に聲あきみさゞきの岡めぐりしもあはれ一夢
谷水の音をいのちに大原のやまぶみせしもあはれひとゆめ
かあしさは心に殘る影もなしたゞ世の中はあはれひとゆめ
こんとしもたゞ樂しみて世をばへん花よ紅葉よあはれ一夢
神よなほさまさずなぐら守らなん舞ふも歌ふもあはれ一夢

さかづきの卷　明治二十三年詠草

一月一日の朝

へだてなき影をつどへて盃にむかふこゝろい神も去るらん

身にふれて昨日忘れぬ人もあらじちよを去らぶる門の松風

天の橋立の松もて作れるしとりに大森さ

が子のこへるゝ

橋立の松に去らぶる春風をたもとにしめていつかあそばん

父君かへらぬ旅にいでたゝせ給ひける日

かゝらんと兼てしりせば何事も告かかましを聞かかましを

御心にたがひがちにてすごしつるこの年月をたれに恨みん

かくいふい一月五日なりその夜い御通夜

つかう奉りて

枕べのともし火青くまたゝきて今も我名を召すかとぞ思ふ

六日いあすの御はうむりの用意などにて

ひまもなし

昨日までよべば答へしわが父の御名を旗手に見るぞ悲しき

七日御かくりつかう奉りはてゝ

つかふべき子らもなき野に只獨なれぬ夜床や今宵しむらん

八日御墓まうでして水などたむけつゝ

ひさごとる手もふるはれて榊葉の影にしげくもちる涙かな

九日人々よりのおくりものを御靈の前に

れきならぶるとて

人々のなさけを君に手向けてもゑます御顔を見んよしもなし

十日故郷なる妹の許へ消息するおくに

おとづれをきくらん人の心まで思ひやられてぬるゝ袖かな

十一日

日の影もありしにかはるけしきかな親に別れしこの頃の空

鼓をうたせ給ひし御面影など思ひ出でゝ

たえ〳〵につゞみの聲を傳へ來て夢ぢの末に夜風ふくなり

十二日渥美ちよ子などのおくりける花の

えだを御前にさすとて

梅の花にほふ木影の常ならばつゞみの聲もきかましものを

十三日御墓にて

此岡の松ふく風も昨日までよそのあはれと聞きつるものを

十四日

何事のありともしらぬをさな子の唯人まねにをがむ悲しさ

十七日御墓まうでせんとて市谷の堀のあ

たりをゆく〳〵

親と子の別れも去らで水鳥い夢あたゝかにはるやまつらん

ゆふ子い母のおはせとて袂よりものとり
いだして御まへにたむけまれば
おほぢにとちごのもてこし菓物もはては嵐に散りや失せなん
かもへばかもふまに〳〵
さめ果てし夢の浮世に夢ならで殘る御墓を見るぞさびしき
廿一日御墓まうでして
くみかふる手向の水の薄氷日影まつまの世にこそありけれ
しるしあまたさてる中をゆくとて
まだきよも親しくなりぬ此石の數に入るべき我身と思へば
廿四日も
日にそへて神さびゆくもあはれなりみはかを渡る夕風の聲
廿六日もまうでゝかへるさに見をば梅を

りさしたる馬車もありけり
世の人い梅見る頃になりぬらしわぞ身ひとつに冬を殘して
夕暮がた烏のむれわたるをゆふ子のあれ
よ〳〵といひければ
よびかはし寢にゆく鳥の聲きけばかはらざりけり親と子の道
待雪
いつかわが軒ばの雪となりぬらんさえゆく月の末のうす雲
夕霞
見えそめし星もかくれて笛竹のこゑ面白くかすむそらかな
平田鈴吉のこへる　ある人の賀に寄石祝を
わしのすむ雲井遙にたつ岩のとはにと君をいはふけふかな
里柳

うなゐ子が牛にみづかふ里川のつゝみの柳はるさめぞふる

早春雨

何となく野山のいろをおもはせて雪まの苔にはる雨ぞふる

埋火のあたりはなれてきゝそむる雨や深山の雪どけのろら

暮山雲

あすの雨いづくのろでにつゝむらん花まつやまの夕暮の雲

二月廿三日は父君の五十日にあたれり御

まつりつかう奉るにつけても

せめてもの名殘と思ひし神わざも今宵限になりにけるかな

喪もはてつればあすいひげそらんと思ふよ

古の是もかたみとゝるからにゐが顔ながら惜くもあるかな

春草

牛の子いまだ跡つけぬあたをゝの草の色ころ春めきにけゐ

たち殘るしろのいしずゑそゐも猶春にはもれね草の色かな

古戰場霞

たゝかひのありし昔をとふ人も霞のそこになれるはるかな

春色浮水

菜種さく片山ぎしのいさゝ川草つむひとのかげも見えけり

窓雨

あまの湯の松の嵐にこゑそへてときゞすぐるまどの村雨

月前霞

よひに見し花のこゑずやたづぬらん霞のうへをわたる月影

閑居

山風のひらきすてたる柴の戸を今宵も月にとゐれけるかな

農

神いたゞわが里人や守るらんあをむ門田にはるさめぞふる

霞隔樹

稲荷山まつりのあとの杉の上になごりさびしくたつ霞かな

三月のすゑつかた小穴いち子が信濃にかへるに

北へゆく雁ぞなくなるあはれ君あすい家路の空にきくらん

伊豆めぐりせんとて三月十一日に家をいでゝ小田原にとまる

旅枕定むる窓のをちかたにまづむかいるゝいづのれほしま

十二日石橋山の麓をすぐ

いにしへの石橋山をすぎゆけばむぎふみぞりに春雨ぞふる

まなづるが崎ちかくみゆ

いづくよりかひくる敵ぞうち寄せてくだくる波にたぐふ響

は十五日馬にて八幡野なぞいふあたりとゆくけしきいとよゝ

春野やくけむりの末に駒とめて磯うつ波のこゑを聞くかな

赤澤山いみちにあたれり

ひばりなく赤澤山の山かげにやどりとぎけん昔をぞふもふ

十七日天城山をこゆ俄に寒し

春風はふもとにきえて天城山落葉にくもるこゑぞすぎゆく

この旅行はまださきぐまでもと思ひしをうの

赤澤山をくだるところにて馬よりたちて右の腕

をうちければ天城山こえてかへさにはおもむき

たるなりされバかた腕かなはで衣きることも箸
とることも不自由なるをいたる所のやどりの女
またはかごかきやうのものまでねんごろにいた
はりたすけてゐさせしかは旅としもおもはぬば
かりなりしそうれしきことにこよひ修善寺のや
どりのこゝろふかゝりしをおもへばいとたのも
し

椿さくかた山ざとを來て見れば神代ながらのはる風そふく

十八日沼津より滊車よりて箱根を遠く見つゝ

ゆくあはれかちよてこえんと思ひしものを

よそにみてけふやすぎなん箱根山たゐ〻霞む松のむら立

故郷なる妹のもとへふみやるついでにこの十四

日おき君の御百箇日にあたれば歌たむけてよな
ぞかきて

諸共ゝ祭のにはにつどふべきひとを千里のよそにのこして

春雨にぬるゝぬたもとともぬれにけるむかしにかはる花の下蔭

京都の猪熊夏樹翁より　この春もゝずてやや
まん墨田川にはふ堤の花の盛をとて博覽會見に
もこまほしけれど今少しさだめがたしなどいひ
おこされければ

大丈夫やむなしかるべきこの春い必ず來ませ花ちらぬまに

又　嵐山峯の櫻よ心あらば見にこん人をちら
てありまてといはるゝに

世の中の心にかなふものならば我をあらしに君をすみだに

四月十二日神保のぶ子の母のいたづきとて俄に讃岐に歸るに

物思ひある身いいかになぶむらん霞む夕べのすまの浦なみ

朝春雨

あくがれし春の心を琴のうへにしづめて朝の雨をきくかな

春月幽

あま小舟別れしかたをみかへればさをうた近く月ぞ霞める

子

月花を上なきものと思ひしい子もたぬ時のこゝろなりけり

菫

故郷のこゝや昔の池ならんくぼめる野べにすみれさくなり

竹

あなにくの竹の夜風や故郷のゆめ長かなといのりしものを

女郎花

風すさぶすゝきがくれの女郎花とふ人なくて秋やすぎなん

松風

たえつゞく波をつゞみのしらべにて琴の音かくる松の春風

古寺花

もりすてゝかねもひゞかぬ山寺の花にいいそぐ夕暮もなし

水邊柳

わが父のわらい遊びにさしすてし川ぞひ柳はなぞながるゝ

春夜

見し花の名殘さびしき手枕に雨をきかせてふくる夜半かな

落花

うなゐ子よさでさしいをて掬はなん井關をくゞる花の白波

牧　童

月にゆく牛かひわらはまてしばし我も交りて歌ひかへらん

尼　寺

女郎花秋に遲れてさくのべゝまれにをしかの跡もまじらず

曉雲雀

鐘のかともたゝし野寺の曉を春ゝひばりのしらせてゞなく

曉庭落花

月にのみまかせやはてんにほひある雪白妙のあけがたの庭

山家桃

山里の垣根の桃の花のうへに落つるゆふひも春ゝいそがず

橋邊山吹

みどり子が鯉よぶ池のしばばしにこぼれそめたる山吹の花

四月十四日父君の御墓にまうでゝ

すゞ菜さく片山はたの春風ゝ御はかの草をふかんともせず

五月二日の夜ものよりかへるとて

何となく昔の友の戀しきにかはづのこゑのしきる夜半かな

田中りん子の夫にたくをたるをとぶらふとて

行く春の名殘の空に雨すぎてぬれまさるらん草葉をゞ思ふ

夕　鐘

くれぬれば月面白し花にのみいとひはつべき鐘のこゑかは

海上夏月

秋風の夢さへのせて海士小舟あがるゝかたに月ぞかたむく

灌　佛

郭公たづねいるさのふもとでら佛の日にもあへるけふかな

氷室

氷室山まつかぜ寒くくれにけり夏をば神やもりかへすらん

里夏月

わけくれし夏野の末に里とへば月こそ獨りあるじなりけれ

夏夢

山ずみは夏もうき世の外なれや松のあらしに夢をふかせて

夜かへるこちよて

五月雨のなごりこなぎるいさゝ川忘れぬ月の影かすむなり

別をつる友にあひあふ心地して雲間の星をあふぐ夜半かな

觀世能樂會の舞臺にて邯鄲の能せし時

我みには醒めぬ夢路の高みくら心よ叶ふ世にこそありけれ

盆なれば父上の御墓にまうづるにわが童なりしころ御供していつもさるべき所々の御墓めぐりせし事などおもひいだされていと戀し今朝使して手向させたる秋草の花のしををかへりたるなどものごとに心ありげなり

女郎花はなふきかへす夕風に去年いかくまでものや思ひし

星

おく山の松の梢をこたるなりながるゝ星のあかつきのかげ

大和めぐりせし時宇治にて

かちまけのうらみもきゐてうぢ川の波の音こそ昔なりけれ

古寺の色より外にこれもまたむかしなりけりうぢのしば舟

昔おもふ袖のしぐれは秋としもかぎらざりけりうぢの古寺

木津にやどりて龜岡氏と共に舟遊す

さしのぼし又さしくだす川舟の思ふ儘なる世にこそあ𪜈けれ
世の中の富も譽もわすれけり歌ふきさそふ木津のかはかせ

三輪にてやあ𪜈けんある夕

三つ山はまだくれ殘るゆげみえて三日月高しかづらきの空

磯城の都のあとなどとひつゝ

みわの山くもの色こそ昔なれ千木たかし𪜈しあとい歸らず

初瀨にて

はつせ川たえ〳〵かくす朝ぎりはあいれきのふの夢の面影

多武峰にて

いつまでもわすれぬ友となりぬべし枕にかつる多武の山風

岡寺にまうづ

岡寺の池の蓮のつゆのうへにひかげこぼしてあさ風ぞ吹く

飛鳥寺ゆめのむかしとなれる世に神風さむしひのくまの森

欽明天皇の陵を拜む

粉河寺にて燈たてまつるとて

この寺の法の燈かゝげても子を思ふやみははれんともせず

和歌山ちかくなりけるに

睦ましく我を迎へてわか山の城ころあれにみえろめにけれ

又大和にかへりてかぐ山にのぼる

松の上にのこる夕日の影ひとり神代に似たる天のかぐやま

ふたゝび大和にいでゝ藤原のあたりを行く

藤原の都こひしくたゝずめばこぼるゝ雨にかはづなくなり

法隆寺にて

たれもみな同じ木かげやたのむらんいかるが寺の夕立の雨

龍田にて

神山のまつみえそめて朝ぎりの立田の里にかけぞしばなく

神のます龍田のもりは秋風の夏もてもれるところなりけり

道明寺にて

神うたのしらべたえたる梢よりしぐるゝ蟬の聲ぞおちぐる

富士に登らんとて須走にやどる

ふゝそめんあすのたかねやいかならん山郭公雨にあくなり

いよ〳〵のぼりける日

わが上に月ならでまたものもなし麓なりけるあしがらの雲

尾花さく富士の裾野の秋風になのるもあまた山ほとゝきす

さかさまにふきあげられて雪とあるいぶきや里の夕立の雨

下りてのち金剛杖にかきつく

雲の上の及ばぬ物と眺めこし富士の高嶺もけふぞわけつる

旅よりをさな子の用心の事など消息のはしにか

きつけておくに

父上いもういくつ寝て歸るぞと問はれて母や答へわぶらん

八月六日父の御墓にまうでゝ

夏草いほにあらはれて招くなりいつの枯野に根を留めけん

甲斐の國なる人に

山風に机のちりとはらいせてうたおもふらんひとぞ戀しき

薄

川風の色こそ白くなりにけれつゝみのすゝき秋ふけぬらん

信濃なる人に

宵々につゆ折りしきて女郎花ふほかるのべの月や見るらん

初秋雨

落ちろむる一葉の上の雨そゝぎ秋の哀れはこゑよりやしる

霧

我とわが柴より外にかげもなし霧の中ゆくみねのかけはし

竹間月

うなゐ子がたけくらべせし窓の竹月のさはりとなれる秋哉

閑居秋風

秋風い芭蕉のうへを渡るなり鹿の音聞きに來んひともがお

夜歸る道にて

川舟にさし入る月いくだかれし棹の恨もしらずやあるらん

笛をよくせし人の年忌に

ふねの音のきこゆるかたにわたるおり昔ながらの秋の夕風

月獨りたゝずむ宿の夕まぐれ笛吹くをおいいづちいにけん

ふねきゝにかよひしやどの庭の苔かちば積りて秋風ぞふく

曉月

月の色いそらにわかれて去ばしまた夜に立ち歸る杉の下道

烏

むらがらすいづくのねやにいそぐらん霜ふむ道の夕暮の空

平野のち子の父い京都の神官なるが今年の葵祭

にそのかざしつる葵なりとて贈りければ

露おがらゐざしそへけん神山の月の色こそこひしかりけれ

野月

思いぬに月ものぼりて野づかさのまつ面白く暮をそめけり

雲間月

面白く世をつくすらん月をたゞ心にまかすくものゆくへい

故郷月

あるじなき里の月影誰がための秋とや夜たゞ獨りすむらん

此月の初めまでにとて稿を起しつる和文典のま

だならねば

三日月の望になりぬる影みてもわがなす業の耻ぉしきかな

十月四日祖母君の廿年祭つかう奉るとてよめる

君のすみたまひし一間い西面にて夕日よくさし

入る處ぉるにぉのが常に參りなれし事などとり

わつめしのばれて

いつか又君とかゞへん夕ぐれの雨にこぼるゝさゝぐりの音

いつか又君とあふがん青桐のこずゑにかゝる三日月のいろ

いつか又君よりきかん冬の夜の長物がたりむかしながらに

同じ日にとりこして大叔母君のも仕う奉る君の

御居間い東の一間にてぉのがゐらい遊びの面影

は大かたこゝに殘れるにいつにかありけん羽衣

の能せよとて御手づから金銀の紙などして天冠

のかたを作り太皷の掛聲などまねび給へる事も

ありしを今い世をへだてたる夢ぞかし

羽衣のわらはあろびの一ふしもゐが行末のをしへなゐけり

十二月始めつかた音羽ふじ子の葬を送りけるに

音樂をよくせし人なりければ

琴の上にかよひなれたる松風をこよひ落葉の下にきくらん

古寺

ゆふけむりほそくなびきて古寺の梢さびしく暮るゝ秋かな

古祠

山神のもりのまへなる丸木橋もみぢののちゝ人もわたらず

初冬

里寺のいてふの落葉霜きゝて冬わたゝかにかすむそらかな

湊江にかれたつ蘆をうつしほの聲身にしみて冬ゝ來にけり

十二月十三日田所貢の柩を送る道にて

人の世をいかにとゝへばもみぢ葉の殘れる枝に時雨ふるなり

廿一日ものより歸りて見れば女子の生れ居たり

しかば

宿の梅に花待ちつけし心地して笑顔うれしく向ふけふかな

子を待たぬ人にゝいかゞ誇らましかゝる嬉しきけふの心を

廿七日は七夜なれば小石川にて生れたる心をお

ほせてさゞれと名づく

苔むさん千代どゝいはじさゞれにも玉の光の顯はれんまで

古寺の卷　明治二十四年詠草

一月のはじめつかた相摸めぐりせし時鎌倉をす

ぐるとて

鎌倉ときけば名もなき古寺の枯木のかげもたちぞよらるゝ

古墳の尾花がもとに咲きまじるなたねもさびし山の内の里

金澤に宿りて

入日さす波をまくらにつゞかせて旅寢たのしき夕暮のやど

逗子に人の病を養ひ居たるを尋ねて

思ひきやさがゝの海によるあみのかゝる處に君を見んとい

鶯にさきだゝれてもうれしきかもはぬかたの梅の下ぶし

同じ處にて

枕うつ波もうきよの外なるにさむれば向ふをちの富士の嶺

さらでだに冬あたゝかき浦里の梅さくやどに朝日さすなり

枯れのこる汀の蘆をまがきにてなみに心をかかぬやどかな

五日ゝ父君の一周年にあたれば

池水に朝日まちねしうすらひのはかなかりける昔をぞ思ふ

風わたる夜さむの窓の燈火の消えてかへらぬ昔をぞおもふ

おちたぎつ川瀬の波に降る雪の跡も留めぬむかしをぞ思ふ

越後の川上喜衛武より雪の深さなどいひおこせければおのれゝ暖國の產にて雪國のさまいすべてしらねをいつかはとれもひわたる事なぞかきて

いかならんけふゝ高嶺の物と見る雪を軒端のあけくれの宿

旅雪

家にいなばむかしがたりとなりぬべし夕暮まよふ雪の山道

水鳥

荒波のよせばかくれん岩の上に眠るかもめよあゝれ世の中

初雪

あさりする雀のあとの見ゆるまでけさふりにけり庭の初雪

波

見えそむる火影さむけき浦里にゆふべさびしき波の色かな

春の初めの歌

ふもと寺こぞみしうめやたづねみん高嶺の雪に春風ぞふく

わが宿の林の内ゐなりゐけりこのみあるよのうぐひすの聲

わすれこし笛くちをしきゆふべかな月ふみかへる梅の下道

宇津木貞夫翁い謠うたふ友なりしに俄に身まかられぬときゝて

うちつれてうたひし物と鶯いけふいづくに枝うつりせし

高畑こと子の父の賀に

たのしみのつきせぬ宿やめぐるらん松にしらぶる萬代の聲

父君の御墓に母君のをもあはせて石をたてたる

頃家人こぞりてうちつれまうでゝ

あすい來て春秋の花も移しうゑん常盤の宿と御靈しづめよ

殘雪

春風に吹きのこされし山のはの雪も霞みて見ゆるけふかな

谷かげの雪のいろこそさびしけれ梅みてこゆる夕ぐれの山

春月

ゆく雁の名殘さびしくみわたせば月こそ空に霞ミそめけれ

霞む夜の月をかたしく旅寢にい荒れし宿こそ嬉しかりけれ

夕梅

夕日影かすむもうれし川上の梅咲くかたにさをやとゞめん

山もとの一村はやし暮れそめて星こそ見ゆれ梅やさくらん

池

少女子の鯉よぶかげも春めきてはなの香よする池のさゞ波

春風ゝ月とこよひもあそぶなりひとおきやどの庭のいけ水

鳥

山里のかきねの椿ちる頃ゝ名もしらぬ鳥のこゑぞきこゆる

山鳩の雨よぶ聲もものさびし人めまれなるてらのこずゑに

夕霞

くれのこるかた山ざとのもゝばやし月になるまで鶯のなく

雨中花

暖かに雨うちかすむ川ぞひのこずゑゝ花になりそめにけり

水郷霞

柴舟に月の夜がすみつみそへていそぐともおき春の宇治人

春月

わらびをりかへる少女のうしろ髪空にもひくか霞む夜の月

若葉

あまの子も磯の若葉をつみつれて世のすさびにゝ漏れぬ春かな

夕春雨

わかれつる人のおごりに似たるかな花ちりはてし夕暮の雨

川上喜衛武の花見にとて上京しけるが四月の末

つかた歸らんとするに

うらやまし都の花をわけはてゝこしぢの春にまたもあふ君

小金井の花を見て

鳥の音もうきよの外のこゝちして春おもしろし小金井の里

此はるは心にかゝる雲もなしきのふもけふも花めぐりして

たゞ一木あるだよ春ゝのどけきにかさなる花の雲やいく里

くもの上に雲ころかをを天びとの花見車やたちつゞくらん

友のもとにて酒のみける日おかめの畫に賛せよ

といひければ

すむ月のゑまひのどけし人の世の波も嵐もしらずがほにて

また何見るにかあらん美人のふりむきたる畫に

かへりみるいけの汀に魚すぎて春風さむくさくらちるあり

上州伊勢崎にあそびける時

かせをたるわか葉のかげにまろねして水車きく夕暮のやど

みそらまでつゞく若葉の桑林まづながめにもとめる里かな

旅としも思はぬ空に三日月のかげ見ねそめてやまず霞める

桑つみてかへる少女のうたばかりつゝみのこせる夕霞かな

春眠

みどり子のゆめぢの末にとぶ蝶の影も眠げになをる春かな

旅中落花

旅人も春いそがぬ山ごねの道あたゝかにちるさくらかな

春香

たきものゝ煙淋しく霞むなり花つみにいでし人や待つらん

故三條内大臣の百日祭に春後思花

世の人のあみだや空に霞むらん春はきのふのみよしのゝ山

宇津木貞夫翁の追善に春月を

うぐひすのなくね絶ねたる岡の上にかすむも淋し夕月の影

又春雨を

塚の上の苔あたゝかにふる雨とさむけき土の下にきくらん

早苗

うゑはてし小田のさなへの下水にまづ影かはす夏の山の端

ふもと田は早苗とるらん神山の松の木の間に並ぶすがごさ

曉

磯寺の燈火はまだのこる夜になみの上こそあからみにけゐ

けさも又あれつる森にうせにけりいたゞきいでし明星の影

夕卯花

ほとゝぎすきくこゝちする夕べかな卯の花月夜獨あがめて

首夏野

すみすてし雲雀の床の若草はその名しられて夏たちにけり

新樹風

さくらの實ひろふ少女の袖の上にこぼれてにほふ露の朝風

笛

入る月のなごり身にしむあのつきに笛の音高し寐ぬ人や誰

夏山居

山水をかけひにうけて此夏は庭のはちすにひくぞうれしき

若竹

時雨きかん冬の頼みも思はれて垣の竹の子葉となりにけり

首夏山

風わたる若葉の上にめづらしく霞まぬふじの雪を見るかな

舟

波の上に浮ぶ一葉の蜑小舟よの渡らひもかくこそありけゐ

山家五月雨

栗の花おちてつもれる山里のわらの軒端にさみだれぞふる

商

鈴虫のこゑをこよひも命にて市にいそがんゆふひかくれぬ

雲の上に月みる人もあはれしれわゐ世渡りの虫のこゑ〳〵

きりとりて市にいづれば女郎花月こそしばし送りきにけれ

大とのゝ閨の内にてきくやいかに霜ふみわけて朝菜うる聲

水邊夏草

夏くれば前の小川のまる木橋ゑげるまこもの底になりつゝ

なついたゞ草葉の下のうもれ水月の影のみまちやわぶらん

山中時鳥

をりそへしつまぎの蕨それもあるに初時鳥きくやまぢかな

ほとゝぎす木曾路の月になのるなり旅ゝ物憂き習のみかは

蓮

消ゑ殘る夕日の後の雲の色にはひいでたる花はちすかな

夢後

いにしへの月かげ白くかゝるなりゆめのあとゝふ松の嵐に

夏草

夏草ゝはにいでそめぬ古塚のしるしの松にたけくらべして

月前納涼

蚊遣火の煙もたえてふくる夜の閨ゝとざゝし月さやかなり

船中納涼

棹の歌うたひかはしてあまの子ゝ小舟に夏の夜と更すらん

夏菊

夏しらぬ里のしるしを家づとに手折りやそへん菊のひと花

晩夏

何となく秋に近くも見ゆるかなかはらぬ空の星のひかりも

瀧

さるの子ぞあそぶ梢のさがり藤しをれぬ花やたきのしら波

七夕

はし祭る頃は來ぬらし山寺のかきのあさがほ花さきにけり

天の川はのみぢそめてくれわたる空おもしろし琴も聞ゐて

海夕立

夕立はいかれる魚のおもかげを波にゑがきて今ぞすぎゆく

松ぞ根をうちてす波の音たかし夕立すらしをちのしまやま

朝とくものへゆくとて

何となく旅おもほゆる曙のかせひやゝかに日ぐらしのなく

面影を草葉の露にとめおきて星はかずなくなれるゐらかな

夕立

しばしとてたちよる野べの松陰をのこしてすぐる夕立の雨

秋ちかし

秋風やしのびて空に遊ぶらん星のいろこそかはりそめけれ

遠情

夕日影しづむ波路のゆく末やこひしき人のものまなぶくに

八月十九日の夜月きよし鈴木まる子よ消息かく

はしに去年の九月にやありけんうちつれて能に

ゆきけるにれのれは橋弁慶をして歸り來ればあ

まりの月のよさに題わかちて歌よみしことなど

とりあつめおもひいでゝ

しのびつる君も昔になりにけりあはれ五條のはしの上の月

雨中虫

虫の音はまくらに近くなりにけり草の夜床に雨しめるらん

秋風

夜な〳〵に月ふきみがく秋風を露にとのみも人やわぶらん

新橋に人を送りける夜

いでゝゆく車の煙きゑにけりなごりのそらに月をのこして

松上月

中々に松の影ふむにはの月さはらぬよりもおもしろきかな

朝顔

日の影もこぼさぬ宿は朝顔のいのちさへこそ久しかりけれ

人のもとに

歌よまんこよひは來ませ萩もよし虫の音高し月もさやけし

いかにせんいつもかはらぬいろながら人まち顔の夕暮の空

月前草花

ふきくれし野分の跡の女郎花れこしながらも月を見るかな

いつにかありけん

柿の葉のいろづく夕べ何となく戀しき雲のゆくへをぞ思ふ

誰と見んうすむらさきの雲間よりうかびいでたる夕暮の月

霧

晴れてゆく霧の波間のをちこちに濡れし尾花も浮沈みして

花落家童未掃

さしすてゝよはのまゝなる山里の柴のあみどに櫻ちるなり

雨の夕

女郎花粟とこぼるゝゆふぐれのあめはだ寒し誰とかたらん

なか〳〵にとはれて物のさびしきは萩ちるやどの夕暮の雨

薄

すゝき原ふく風白くなりにけり雲雀がくれと見しは昨日を
うつし植ゑし人は昔のふるさとに一村すゝき風そよぐなり

友だちの墓にて

昔思ふ涙に目さへふさぎりてしるしの石の文字もよまれず
あやしくも手向の水のにごれるい涙や雨とふりかゝりけん

秋の雨

池水に柳のおち葉たゞよひてあきも夕日のかげぞしぐるゝ
旅寐する人いかならん燈のかげさむき夜にあめぞこぼるゝ

女郎花ちる

嵐にはたへし垣ねの女郎花こぼしそめたるゆふしぐれかな
人とはぬ夕べの宿の女郎花こゝろしづかにちりそめにけり

殘月

川水のいろにすみゆくあまの原朝月たかしつゆよわかれて

ともし火

それとなく昔の友の戀しきはねられぬ夜半のともし火の影

秋花

山寺の卒都婆ながらにゆひこめし垣のみそはぎ花咲きにけり

仲光といふ能せし日おや子あうむのなぎいふあ
たりいいかなるこゝちかせしと人のいひけ是ば

これも亦夢かとぞ思ふ何事も夢となるよのこゝろならひに

田家

寐おがらに門田のなる子ひく宿は入るまで月の影も隔てず

紅葉

昔わが父とやどりし山でらのひともとかへで秋ふけにけり

秋雲

秋なれやくちおし色のゆふそらにゐがきそへたる雲の遠山

水邊暮秋

流れよる紅葉もくちて里川のいろこそ秋のかぎりなりけれ

十一月のおかば安中までゆく途に瀛車の窓より見いだして

淺間山はつ雪しろし旅人のこよひのとこやさねまさるらん

磯部にやどりける朝

淺間山けむりのすゑに月おちてしらぬ旅路のそらも迷はず

妙義山に紅葉見んとてのぼる

織ヱのこす木々の錦も神わざのくすしきひとつこれの岩山

夜嵐やいで入り今宵あそぶらんひらきすてたる神の岩門に

雲の色は變らずながら秋ふけて岩門をくゞる木がらしの聲

神杉の木の間〳〵にもみぢ葉をゆふひいろどる白雲のやま

いく時雨しぐれ〳〵ておく山の苔むすいはほ紅葉しぬらん

紅葉ばの盛りよわへるそれのみか今日こそ神の祭なりけ

碓氷峠いおそしと聞きつれどなほ見どころあり

碓氷山やまふとところの紅葉ばに神のたくみの奥も見えけり

もみぢばのおくれ先だつ憂ひをもしらでや水の下くゞるらん

安中にかへりては美濃部精の樓にやどりて

ゆあみして神代のまゝの青山にむかふ心をなにゝたとへん

うたふもふ外にこよひい事もなし向へばなるゝをちの白雲

少女らの稻刈る歌もしづまりて淋しき小田に月ぞふけゆく

あすよりい岩根の落葉ふみわけて幾度夢におりのぼるらん

このたびの紅葉見いすべてかの人のたまものなれば

奥山の紅葉の色もくらべてい君がなさけのふもとなりけり

安中の室橋信好い磯邊に同行せし人なりしかば

いつか又君ときかましうすひ川々瀬にむせぶあき風のこゑ

妙義にて紅葉をる人あり

神山の岩垣もみぢおもひきや風よりさきにきみを見んとは

雨の日滝の川の紅葉見にゆきて

ろみつくすちしほの紅葉ひとえほいなか〳〵雨の恵みなりけり

もみぢばのしがらむ見をば山川の水には秋も急がざりけり

共に旅せし人の許に

忘るなよ淺間おろしの末さゆて燈火消えし夜半のたびねを

わするなよまくらになれし川れとも今は戀しきゆめの面影

忘るなよ秋れもしろき山里の月ふみわけてやどりせし夜を

初冬

山里を秋よりのちにとふものは夕のしぐれ夜半のこがらし

落葉

つれ〴〵のすさびに風やもみぢばを集めてい又吹散すらん

人をまつ

時雨れ來ぬ契りし人はいかならん道にやぬるゝ陰や尋ぬる

雨塞き日鈴木まる子が福嶋へ立ちて後いひやる

おもひやるきみがたびぢのゆく末い雪にやあらん白川の關

枯野月

さすからに草葉に氷る月かげはやがて末野の霜となるらん

水鳥

離洲に羽ねはす鶯のあるぞともしらで薄日のまた隠るらん

涙

緑子の寝覺の顔におくものいたゞおほかたの花のしづくか

人の病をとふとて飴に添へて

假そめの雨のしづくも竹の葉の露にしかへば嬉しからまし

歳暮

神まつる外にはのこる事もおしいざ一年のゆめがたりせん

一月のはじめものの書かんために大宮に遊びて

霜氷る松のおちばをふみわけて日かげにあさる友どりの聲

起いでゝきのふの續きいざかゝん枕の火桶すみもおこりぬ

五日例の父君の御墓まうです

親鳥のもくへを空にたづぬれいこたへぬ雲の色ぞしぐるゝ

宇都宮の人來てこの夏い必ず日光になぞいふ

二荒山すぎもる月を身にしめてうたはん夏の契りわするな

去年の秋妙義の紅葉見にゆきて下仁田といふ方

に道ふみ迷ひたる事ありしをおもひいでゝにや

あらん同行せし美濃部氏より下仁田の葱をれく

られしかば

夕霜に谷の紅葉をまかせおきてかへりし山の名殘をぞ思ふ

霞

來んはるのつぼみを見せてゆめふかき草の枕を訪ふ霞かな

田鶴が音の乱れてさわぐ雲井より夕ぐれすごくふる霞かな

冬花

足引の山ふところにすめる身い雪よりさきに梅を見るかな

新年

天地のひらけしまゝの人心またたちかへりいはふけふかな

山

水鳥のつばさばかりに見ねそむる海路の末の山もなつかし

遠山雪

夕ぐれの山路はそれか二峯の雪になりぬるありあけのかげ

大坂人の賀に寄松祝

君がへん千代にひかれて松が枝も花さく春に逢はんとすらん

向嶋を散歩して

すみだ川つゝみの柳いとのびてまたるゝねだに春風ぞふく

そゞろあるきせし道にて

山でらの梢もはるい桃さきて人まちがほにうぐひすのなく

古塚のあたりの草も花さきて春日うらゝに野いなりにけり

小兒のわづらひけるころ春雨ふれり

いちじるき雨のめぐみをわが宿の花の蕾に見んよしもがな

ものよりかへるに

星かげもまばらに霞む夕暮のあはれをそへて琴の音ぞする

初花

松風をまだうきものとしらぬまの蕾ぞ花のさかりなりける

春夕

寒からぬいそ山かげの夕月夜はじめて花にかすむころかな

春草

谷陰のくち木のうつぼ春いなほ苔の色こそむかしおりけれ

春社

くちのこる鳥居の笠木此春もおつる雲雀のみちをしへつゝ

旅にいでたつみちにて

明暮にみなれし花のあたりまではや旅心地するあしたかな

濃車にて駿河路にかゝる雨景いとさびし

つり舟のかへるかたよりぬれそめて春雨かすむ三保の松原

京都にやどりける朝雨はれたり

朝戸あけてうち向はるゝ東山まづ何よりもおつかしきかな

花はいづこも春なりといへば

雨のはれ風のさきにぞわれは來しちぎりうすしき山櫻かな

ふむろにて

あは雪のこぼれしばかりちる花ををしとてやなく鶯のこゑ

なほゆく〳〵

大澤のつゝみの花の雲間より見ゆるもさびしみさゞきの山

嵐山の花なにとゝもいはず

嵐山花の盛りにあひにけりさだめなきよとたれかいふらん

さしすてゝ花やみるらん大井川いかだのうへに春風ぞふく

花は少女をとめは花に似たるかなうべこそ花の都なりけれ

桂などいふあたりをゆくに蛙多くなきたてたり

何ならぬ蛙の聲もなどころのはなにはうたふ心地のみして

松尾の社にまうづ

松の尾の峰のあらしも聲とめて西山づたひはなや見るらん

祇園の夜ざくら見にゆきて

かゞり火の烟は花に霞む夜の空おもしろくあはゆきぞふる

月輪御陵を拜して

ゆきのうちに春しりそめし月の輪の山松が枝に霞たなびく

寺男その御門前を掃ひゐたり

花ならば箒とるてもたゆまゝしかればをよするはるの庭守

稲荷山にのぼりて

春風にふきのぼされていなり山杉よりふくの花も見しかな

大坂をたちて大和路に向ふ雨また瀧車をおくれり

なにはでら塔をすみゐにかきすてゝ麥生色ぞる春の雨かな

六田の渡をわたるに雨なほくらし

いにしへの六田の淀の川柳おもかげとほくかすむはるかな

吉野にて

花はまだいそぐともなき夕暮にきくもよしのゝ山寺のかね

これやこの年月ながく面顔に見ゐ渡りつるみよしのゝはな

みよしのゝ吉野の花を見ぬひとや花を少女に譬へそめけん

藏王堂にて

うゐかへていまいわか木の櫻花なれも昔のはるやかなしき

御陵を拜す

塔の尾のみさゞき寒くふる雪はなほ花あらぬ心地こそすれ

金峰の社にまうづ

花の上にさはらぬばかをふくもよし吉野のおくの松の春風

吉野をいづるとて

花にねて花にねざめて花にゑひて花にうたへり何をか望まん

大坂に歸るみちにて

うち霞むながめの末のなにはでら戀しき人の心地のみして

荒木やす子をとふに短冊をいだして何か一つと

乞ひければ目前のさまを即ち

こん春も又こん春も來てを見ん高津のみやの霞むけしきを

菊岡彌八郎に懇ろなる心づくしによりて吉のゝ

花の時節をも道をも宿をもねし事なれバ大坂に

かへるすなはちよみておくる

面影は夢もはかれぬみよしのゝ花こそ君がめぐみなりけれ

神戸行の瀧車に乘るに見渡す限り菜種ならぬはなし

思ふ事かなひしうへに思ひきや思はぬかたの花見せんとは

須磨にて

古寺の若木の花にいまもなほふくかうしろの山おろしの風

何となく須磨の古寺きて見ればむかしに似たる春の夕ぐれ

古へもかくやあはれにながめけん夕暮かすむ須磨のうち波

上のやまかすみおろしのすゑなれや藍もてゑがく淡路嶋山

かへりにゝ神戸に遊ぶ

須磨もよし舞子も嬉しそれならでけふこそ見つれ布引の瀧

布引の瀧の白糸くりかへしくりかへしてもあかぬはるかな
生田川流れてすぎしいにしへをうつすもうれし摩耶の山蔭
琵琶湖のあたりを行く〳〵
島姫のすさびすてたる琵琶の音も聞く心地して霞む海かな
岐阜をすぐるに地震の跡猶見えたり
すむ人のこゝろも知らでかたむきし軒の春草花さきにけり
家づとの櫻菓子を上眞行におくるとて
めせや君花の重荷におひうへし吉野少女のやまづとぞこれ
加賀人の賀に寄松祝
聲毎に千代をこめたる松風い君ぞわもとにおれて吹くらん
また人の賀に寄鶴祝
霞む日の空に友よぶ蘆田鶴のその子の千代い君ぞかぞへん

また人の賀に寄盃祝
よひ〳〵に向ひおれたる盃のそこにぞ千代の影は見えける

春　月

小松原霞みそめたる夕月のかげおもしろしたれをさそはん
毛山正辰は家に寄留して笙習ひに通ひし人なり
國に歸りて後消息のはしに書きやる
笙の音のたゞし宿こそさびしけれ若葉は去年の面影にして

夏　雨

椎の花おちてたゞよふ山がはの水上さむきあつのあめかな
東儀彭質の柩を送りて
上野山松のあらしのいづかたに人のゆくへを今宵たづねん

夏　草

夏草はしげりにおりぬいさゝ川下ゆく水のかとをのこして

上州に遊びける時

かはづきく人はかへりて里川のくろ木の小橋月かすむなり

蟬の聲しぐれそめたる木の間より夏なき越の雪を見るかな

雨後

みづたでの下葉すゞしくこす波に夕だつ雨の名殘をぞ思ふ

須磨に病を養ひ居る人のもとに

うらやましうしろの山風にたもとふかせて歌かもふ人

僧

落葉ふく嵐のあとのみやま寺あかくむ道はけさもまよはず

晩夏

何となき虫のこゑこそまじりけれ夏も末野の荻のうはかぜ

暑さの強きに物かきつかれたればすゞしき方に

と川づたひして

水車めぐる浮世のわざとしもしらずがはなる音のすゞしさ

瀧の音にかきみだされて山川はわがくちずさむ歌も聞ゑず

山里は市のあたひのはかになほ瓜の花こそさかりなりけれ

また旋頭歌

摘みためし花をあつめて家路急がん文机の筆やまつらん紙

やまつらん

海水浴にとて母と共に片瀬につかはしたる小兒

ありそれに貝ひろふ袋を送るとてかきつけたる

歌

汐水にふかれ〳〵て江の嶋のからすのごとく色くろくなれ

荒あみにうたれ〳〵て江の嶋のいはほの如く身は強くあれ

砂の上にいろは習ひて疲れなば波と唱歌のおさらへをせよ

是もまたかゞへおぼえて忘るあよ集めし貝の二つ三つ四つ

砂山の松の下みちふみわけて今かへるらんわが子をぞ思ふ

いま三日たゞばむかひに參るべし妹なかすな母こまらすな

八月の末瀛車の窓より見いだして

秋風は上總の沖やわたるらん舟の帆かげのこゝちよげなる

松山にさす日のかげも何となく秋の景色になれるころかな

金澤なる東屋にやどりて

枕とる窓の火かげのたへぬまですさきの松に夜風ふくなり

あまの子が網はすふねの夕日陰いづこともなく秋めきにけり

岸陰につなぎすてたるあま小舟うつ波白く夜はふけにけり

世を渡る舟のゆくへも名所のけしきの内にかゞへてゞみる

わが箸にもれてしばしの夕波にをどる生簀の魚もあはれけり

初秋

三日月のかゞりろめたるゆふべより堤の榎いろづきにけり

静かなる夜

琴はあれどひく人もなき山里をとはれてをしき月の影かな

草のかのしめる垣ねにふけそめていよ〳〵月の面白きかな

時としてい

天地のめぐみにもれぬやまざとの垣の藤豆實となりにけり

ある朝

芭蕉葉の廣葉すゞしくなりにけりいざ筆取りて歌書きてみん

霧ふかき朝

庭の面はぬれたる紙に七草をかきちらしたる心地ころすれ
女郎花はなさく庭の朝霧いはれたるよりもおもしろきかな
うちわたす遠の松原霧はれてあゐながしたる空もうつくし

再び仕官せよと勸むる人に

中々になれては露のおきふしも梢にまさる野邊のこはろぎ
摘まれては又すてられん花よりも色なき露の身こそ安けれ

片瀬にてやどりける家よりもらひたる團扇に龍

口寺の畫をかきてありしかば歸りて後

たが夢のあと訪ふ物となりぬらんかゞへあれたる里寺の鐘

ある夕

あはくこくゑがきわけたる遠近の木々おもしろし夏の夕暮
星の數かぞへ覺ねしうなゐ子の聲もすゞしく暮るゝ空かな

おのが住居の歌よみあつめたる中に

柿の實のいろづきそめし山里を秋のこゑしてわたる雨かな
二つ三つ垣根にのこる朝がほの花もちひさくなれる秋かな
きゝてたゞうれしき物はとく〳〵と枕にひゞく雨だりの音
きのふけふ穂にいでそめて薄原うすくれなゐの秋風ぞふく
花すゝきほにいづる頃の村雨はたゞ何となく淋しかりけり
たけのびし薄のかげもものすごく人なき宿に夕日さすなり
暮れそめて月になびゆくすゝき原長き短かき影も見えつゝ
わが宿の垣ねの尾花うす霧の中にたてるもおもしろきかな
まつものは月より外になかりけり萩ちるやどの夕暮のうら
萩の花ちりしく庭の露の上におほかげのこすありあけの月

荒井の藥師にまうでゝ

栗もよし柿もうみたり山里の秋たのしくもなれるころかな

閑居月

待つ人もおくて暮れ行く我宿は月ひとりこそ浮世なりけり

何ごともこゝろにかなふすまひかな池にちる萩松わたる月

秋風

莖がちに立てるすゑ野の女郎花なほやせよとや秋風のふく

秋寒し風物すごしいかにせんなれぬすまひのやまざとの空

十五夜

山里の垣ねのすゝきかめにさし手向くる窓に月ものぼりぬ

秋鳥

大方は萩ものこらぬ山ざとにゑらぬ小鳥のこゑぞきこゆる

秋時雨

山里は秋の日影の淋しきにけふもとき〴〵うちしぐれつゝ

川

春風にふきのこされし心地してひとすぢしろき谷川のみづ

萩ちる

ありあけの月はわかれし山の井のつるべの水に萩が花ちる

露寒し

かれ〴〵にたてる末野の花すゝきちる露寒し秋もいく夜ぞ

暁

けふもまたいたゞき出でし明方の月面白きたにのかけはし

鶉

うつ波の音をうしろに越ゆくれば山路しづかに鶉なくなり

葛

ひとしきり波うちよするこゝちして葛の上葉をわるる夕風

小松

小松原末はるゞと霞む日はたびも忘れておもしろきかな

末とはくかすむ岡邊の小松原をとめぞそでも見ゆる春かな

ものゝ音

秋の雨のやゝはだ寒き夕暮にいづこおるらん琴の音ぞする

折にふれたる

まつ物は月より外になかりけり萩ちるやどのゆふぐれの空

秋の田刈る

一年の樂しき時になりぬらし稲刈る小田につどふさとびと

和文學史の成りたるを祝ひて草稿を机につみそれに酒肴など供養ごゝろにゝなへつゝ

世の中の常に變りてうれしきは馴れつる筆の別れなりけり

鬼の首とりてうれしと誰かいふ今日の心は天にのぼるまで

十一月日光に遊ぶに二荒山はましろなり

秋と冬行きかふ神のそでならしふもとの紅葉峰のしらゆき

霧降にて

今日までもこぎ出し我やひらふらん山彦さむき霧ふりの瀧

秋旅

ふくとなき春の風さへ旅といへばさびしきものを秋の夕暮

秋寺

山寺は秋にぎはしくなりにけり一木の紅葉名にたちしより

去年の春まで住みつる小石川の家をすぎて

人の取るつるべの音も住み馴れし家と思へばなつかしきかな

初冬

苔のいろ垣のすがたもうらがれて淋しき庭に冬は來にけり

旅のしぐれ

さらでだに冬は日影のみじかきにしぐれひまなき旅の山道

伊勢參宮せし時

天の戸を出づる日影をこゝにきてをがむも神の惠みなりけり

五十鈴川神代ながらに行くみづのきよきを民の心ともがな

二見浦

夏ならばゆめを吹かせて一夜ねん二見の浦の松のあらしに

筆とりて童あそびにゑがきたる二見の岩を今日見つるかな

寒月

霜とさえ雪と光りてはてもなき枯野のうへをわたる月かな

畫

草かりのうたおもしろく聞ゐきて堤の夕日かげもいそがず

駒場にすむ人に

春たゝば酒あたゝめてまち給へうぐひすきゝに君を尋ねん

春のはじめのうた

雪きゑて山里とはくかすむなりいづくよりまづ梅を尋ねん

若草も夢のまくらやもたぐらんかすみそめたる夕月のかげ

ある夜

木がらしのたえま〳〵に聞ゆるやおくれし雁の子を思ふ聲

春

いとけなく遊びろめたる春風をやました水の色に見るかな

きしの色はまだかれ〴〵の山川に水ころ春の、聲はたてけれ

梅をさぐる

そこにゆく牛飼わらはこと問はん梅ある寺や森のいづかた

夕鶯

鶯のこゑをたきゞにおひそへてゆふべいそがぬはるの山人

春風もねぐらさだむるゆふ山にうぐひす獨いろがざりけり

曙

あけわたる海の上こそしづかなをかまどの煙舟になびきて

遠方の松原くろくミねそめてたびおもしろきあけぼのゝ道

往事

ありと見し親こそ夢となりにけれわらは心は猶うつゝにて

顔に墨ぬられぬりたるそのかみの學びの友もなかゞなき人

柳

つり人のさをよせかけし心地してつゝみの柳糸ぞながるゝ

ひともとの川そひ柳あめみゐてくれんとすれど暮れぬ空かな

若草

若草は摘むべき丈になりにけり見ざりし花の色もまじりて

初春月

鶯のおとづれそめし夕ぐれにかすむうれしき月のいろかな

雛祭

ひなまつる家おもしろし少女子のまめ盃もかずめぐりつゝ

柳

ひとゝはぬ門の柱のふる柳はるはさすがにいとたれにけり

雪消ゆる

鷺の毛の散りたるばかり見えし雪うせて長閑に霞むのべかな

見花

けふも又岡づたひして古寺のしらぬ花をも見いでつるかな

落花

苔の上をまだらになしてちる花の雨に音なきゆふぐれの空

藤

中嶋に背をはす龜もかずみゐて藤かもしろくさける宿かな

春風

琴の音のあるじをとへば青柳のこたへぬゐだに春風ぞふく

夕霞

草摘みてかへる少女のゆくへまですみゐよなして霞む夕暮

達摩のあくびしたる畫に

九年むかひなれたるふるかべのこほろぎ寒く秋ふけにけり

菊岡さだ子の父の六十一の賀ょ

雲の上に千代よびかはす鶴の子のその親鶴の齡ひしらずも

君ならで誰よろづよの友とみんこけむすいはほ池にすむ龜

遲日

夕月は花の梢にかゝりてもまだくるゝとは見ゐぬそらのあ

樵路躑躅

柴人ぞたきびせしのゝ木がくれにおも影のこす花の色かな

暮春

春もはやわかれをつげて行くそらにひゞくも淋し入相の鐘

山里の垣根のわらびたけのびて心ぼそくもなれるはるかあ

春星

今までもみゐたる星のかくれしは霞むやいくへ春の夜の空

旅泊

碇おろす音こそ響けわが外に夜ふけてかゝる舟やあるらん

山家首夏

山里は夏まだ寒しくれそむるのきのわか葉に月もかすみて

水邊首夏

風わたる池のうきくさいつしかと夏の色にもなれる頃かな

海邊首夏

いさり火の影も涼しく暮れそめて霞まぬ波に夏はきにけり

閑居首夏

ひと訪はぬやどの鶯いつまでか春にかくれてなき殘るらん

橋螢

五月雨よながれやせんと危ぶみし橋のわたりを行く螢かな

農

一うねをけふにのこして歸りつる小田暖かにふれる雨かな

百合

罪もなき子の泣顔に似たるかな露もつ庭のひめゆりのはな

貝

磯ぎはにおりたつ乳兒の貝合せ負くるや櫻勝つやもみぢ葉

夕立雲

松山に一むらかゝる夕立のくものあしこそゆるぎそめけれ

納涼

わが影をうつすも樂し庵のとのいさゝ小川に夕すゞみして

夏　鳥

あつからぬ先にといそぐ山みちのなつくさがくれ鶯のなく

七月の半山梨めぐりせんとて出で立つ時

夏の日も休まぬ蜂の跡とめてぶだうの花のかげやたつねん

小佛にて

あつかりし事も忘れて夕日かげうすらぐ野邊に花の紐とく

横にさす夕日すゞしくなりにけり降りしやいかに雲の遠方

笹子を越ゆ

笹子山登りし方を見のへればなれて追ひくる風もありけり

田野村の景德院にて武田氏の生害石を見る

物いはぬ石のほとりに立ちよれば梢隔てゝ日ぐらしのなく

天目山に登る

天目のやま風さむくかろしきてむかしの夢の末もつゞかず

なでしこの花こゝろなしこれやこの朽ちし屍のなれる岡山

勝沼にいる

朝露はぶだうならざる色もなし秋風いかに富まんとすらん

御嶽より馬にて歸る

待てしばし危き岸に駒とめておほ見てゆかん奇しき岩やま

山みちは駒のたてがみ吹きみだす風よりも外にあふ人もなし

武田氏の古城を訪ふ

いづかたに昔のこゑをのこすらん畑の瓜づる風もうごかず

身延に詣づ

法まなぶ人はねむりて身延山ともし火青くさよふけにけり

此寺のいはれを知らぬ身にも猶まづすむものは心なりけり

舟にて富士川を下る

今まではうしろを見せし富士の嶺も表になりぬ一日へぬまに

雨の後に月をみる

雨はるゝ野邊の千草の露ごとに光をわけてのぼるつきかな

雲はれぬ風をさまりぬ月とわが二人になりて夜は更けにけり

妻うしなひける頃よめる歌ども

なみださへこぼす力もなきまでになりたる人を見るぞ悲しき

治むべき家さへ子さへふりすてゝ別れし人の恨めしきかな

唇をうるほす水もいまはやとゞかぬ人となりぬけるかな

二つあるものゝ一つを失ひぬをさな子いかによに育つらん

まだしらぬあすの心やいかあらん妻おきやどの秋の夕ぐれ

火は消えぬ灰より外にものもなしろの灰さへに影は留めず

歎かじと幾度思ひあきらめて見れど子のある身をいかにせん

あすよりは袖の綻びたれ縫はん悲しき世にもうまれけるかな

思ひあまり人見ぬかたに向ひては日に幾度か袖しぼるらん

諸共に植ゑつる花を君にまづたむけんものと思ひかけきや

花を見て泣かんものとは昨日まで思はざりしをあはれ世の中

秋ふけてのこる枯のゝ花すゝきたより少なくなれる我かな

聲たてゝ枯葉をわたる秋風もつまある人はよそにきくらん

あるじおき人の家にやまよひけんわがやに歸る心地だにせず

門にいでゝ送りし人は送られて歸らぬ人となりにけるかな

見る毎に枯ぬのみまさる花みをばいよ〳〵遠くなれる君かな

松が枝にかゝりそめたる三日月をともに見し世の人は歸らず

うきことをかしき事も語るべき人なき宿に冬は來にけり
月は又まとかにありぬもみぢばのちりにし人を何にたとへん
月みつゝ思ふらんとや思ふらんならはぬ露の床にすむひと
諸共にあそびし人は夢なれやかれの〻日かげ春もかへらず
冬枯の木陰の落葉かず〳〵にかきあつめつゝ昔をぞおもふ

五十日祭に

せめてもの君ぞ名殘と思ひつる祭もはてとなるぞかなしき

秋聲

とりあつめ秋のあはれを聞く夜かな庭のむしの音軒の村雨

田家秋風

豊年を祝ふ祭のはたの上にふくもゆたけき小田のわきかせ

夕野分

むら烏つまのゆくへを吹きわけてのわきぞさわぐ夕暮の山

古寺秋夕

栗ひろふ人はかへりてふもと寺さびしくなりぬ秋の夕ぐれ

稲花

けふよりは秋たのもしくありにけり月にはほへる稲の初花

秋夢

夢にみし雨のなごりをいまもなほ聞かせてふくか荻の上風

湊月

ひるの雨にかはひし苫をしきかへて湊の月にあかす夜半かな

森霧

墨筆を洗ひし水のいろに似て霧おもしろきもりのあけぼの

秋水

心なき野中のみづのけしきまでさびしき秋になれる頃かな

秋鐘

中々のちからなりけりわけまよふ尾花がすゑの入相のかね

山の井の巻

明治二十七年詠草

井氷

山の井は氷の下になりはてゝ水にことかくあさぼらけかな

冬殘月

かぎりなく身にしむものゝ霜枯のこずゑにのこる有明の月

夜霞

夜あらしに消えたる窓の燈火をわらひがほにもとふ霞かな

杉雪

寺山の杉がえしろくかりにけり木陰の塚やうもれはつらん

初春雨

花をまつ夜半あたゝかにいつきかん行末遠き春のあめかな

夕霞

天の原こひしき人のねもかげをみせてもかすむ春の夕ぐれ

山を望む

明暮に向ひなれては富士のねも低くなりたる心地こそすれ

鷺

夕日影色ぞりわたす波の上をよこぎる鷺のうつくしきかな

煙

かすむ日の沖に一すぢたちそふや入りくる舟の煙なるらん

三月中旬人の越後にかへるを送る

此秋の月のちぎりを忘るなよ越路のろらにかへるかりがね

春草

少女子がたもとの色に萌えにけり行末霞むのべのわかくさ

春雨晴

二つ三つすゞなの花も見えそめてはれゆく雨の末霞むなり

貝ひろふ

歌によむものともしらぬ少女子がひろふもやさし梅の花貝

石面苔

いしぶみの文字も埋めてわを獨り春しりがほの苔の色かな

懐舊

今少しいふべき事もありつるを影よりもろく消えし君かな

梟

すみすてし野寺の森のこずゑにはくれぬうちより梟のなく

谷

大かたの人まだしらぬ谷陰のさくらを一木見いでつるかな

首夏水

躍りゆくゝかばかくれのいさゝ水魚よぶ人の影も見えけり

更衣

ほとゝぎす聲たえし日をこよみにて衣がへする木曾の山人

山中殘鶯

夏さむき山下かげのうぐひすいつも初音の心地のみして

夏木

紅葉せん秋の哀れもまだしらぬかへでの若木夏い來にけり

谷殘花

花ひと木殘るとみれば谷陰いはるもかへさの道まよふらん

雨中薔薇

いばらさくかた山里の袖垣に夕ぐれさむくかゝるあめかな

鳩

山鳩よふまれながらもふる寺の軒のはるくさ花さきにけり

葬

何となき山田の水もうきくさの色すゞしげよなれる夏かな

夜路

ゆけばたえとまれば續く虫のねをよそにや聞かんわけや迷はん

曇

なか〳〵にはれたるよりも樂しきは時鳥きくゆふぐれの空

山中時鳥

時鳥よるならできく夏山はひとりこゆるもおもしろきかな

早苗

早苗とる時い來ぬちし遠近にひゞく田うたのやまびこの聲

紫陽花

五月雨の日數も末になりぬらし盛りすぎ行くあぢさゐの花

池五月雨

みえそめし蓮のうきばを池水の下になしてもはれぬ雨かな

夕水鷄

村雨をもよほし顔の夕まぐれ水鷄をきかでやみおましかば

船中夏月

磯ぎはに繋ぎすてたる海士小舟かりても月に涼むよはかな

雨後夏草

村雨のなごりのつゆを夏草に拂はでみるもすゞしかりけり

野螢

たけ高くのびし夏野のすゝき原なびくかたよりゆく螢かな

夏魚

うなゐ子が盥の水にはなちかふ鮎にも夏はなりぬてしがな

夏田家

あす一日うゑば門田はをはるべし夕日うれしきをちの松原

鎌倉雜詠

潮あみてかへる少女の袖の上にふきうめにけりうらの秋風

おり登る人聲まれになるはてゝともし火すゞし長谷の古寺

磯山をいろどりわけてのこる日の影ゆく舟やたが戀ふる人

波の音の遠くかるまでさよふけてきゆるもうれし窓の燈火

江の嶋にあすは遊ばんふけそめし星の色こそ日和なりけれ

天地は皆わがものとなりにけりいざ歌よまん風よきてきけ

浦風にふきおくられてゆきかへる都の夢もすゞしかりけり

たちならぶ松かげごとにみえそめて海もかすめる明方の空

けふも又いざおきいでゝ汐あびん由井の濱松朝日さすなり

浦風にまくら吹かせて寢ながらに月見る夜半は家も思はず

頼朝の墓

かまくらの山下かせになびきつる草木もいまはたゞ秋の聲

由井濱

うしほあむ人もつどひて古への由井の濱邊は夏ぞにぎはふ

鶴岡八幡宮

つるが岡の松ふきおくる秋風にいてふの落葉數ぞろひゆく

稻村崎

二つ三つ沖ゆく船も見えそめて夕日はれゆくいなむらぶ崎

七里濱

うちけむる七里がはまの波間より浮びて青き江のしまの山

江嶋にて

ふもしろく暮れ行く嶋の松の上に三日月一つみいでつるかな

三浦郡の長者園に遊びて

飛ぶ鳥のゆくへはるかに見わたせば霞に殘るかまくらの山

沈む日のなごりの雲にかきすてし墨繪の富士の美しきかな

大宮より歸るみちにて

秋寒しなかばいろづく山ざとのいなばの風に雨もこぼれて

波もなきみづのわもてに富士見ゐて秋美しくなれる空かな

ふもひいづる事ありて

うちつれてあろびしのべのすゝき原昔に似たる秋風ぞふく

共に海水浴しに來てゐたる村岡たつ子が歸りしより

あとにて鎌倉よりの貝拾ふにも人ひとり足らぬけふこそ淋しかりけれ

濱にいでゝ貝拾ふにも人ひとり足らぬけふこそ淋しかりけれ

月前薄

うすゞゝの薄を窓にかきすてゝふくるもをしき秋の夜の月

鐘

紅葉ある山に〳〵とわけくれてふもはぬ寺の鐘をきくかな

朝顔

朝顔のはなより下にありにけり寺井のみづのありあけの月

海邊月

安房上總おもかげかすむ波の上に大嶋かけて月ぞすみゆく

遙々と月にうかれてかへるさの磯路い汐に取られつるかな

月かげのふけゆくまゝにわたの原さはる夜舟の漁火もなし

浦賀に遊びける日あたご山にのぼりて

出でゝ行く舟の煙のおもかげに霞みのこるやあはのとは山

湊

朝なぎにたがいでぶねかかくるらん湊の岡に人のむれゐる

佐々木信綱の散歩せずやといざなひおこせたるに

若葉見にいざいでたゝん山里の初ほとゝぎすそれも聞くべく

社頭松

わがためにゐのうゑたるうぶすなの社の松も春ふけにけり

木陰納涼

けふも又ふづくゑすゑてわが庭の桐の木陰に暮しつるかな

雨後夏月

夕立のあごりさかまく波の上をしらずぞほにも渡る月かな

中川則祥の讀本字引のはじめに題す

斧とりてきりひらく人のなかりせば言葉の林誰かわくべき

雨後紅葉

村雨にふりこめられて山寺のもゝぢをひとり見る夕べかな

風前擣衣

松風のたえまくにきこゆるやとほざとをのに衣うつこゑ

月下菊

庭のおもは月とはおとになりにけり霜も心や空におくらん

初霜

山鳩のふみこぼしたる紅葉ばにけさみえそめし霜の色かな

十一月近江の石山に遊ぶ

けさいまだ犬よ戸外のあともなしもみぢかさなる古寺の庭

京都の秋見ありきける時

ちはやぶる加茂の神杉秋ふけて染まぬ色さへ淋しかりけり

もみぢよりもみぢにいでて東山おもはぬ佛をがむけふかな

清水の塔のたかみにくれのこる日影さびしき秋のくれかな

いにしへの二條のみきの松の上に木高く秋の色の見るかな

高尾の紅葉をすりたる手拭を人におくるとて

北山のしぐれの色を人とはゞものゝほのぼの雲とこたへよ

閨怨

ものゝふの妻のならひをいかにせん千里の外の雪にある頃

かちどきの歌と聞きしは夢かれや枕にのこる木がらしの聲

爐邊閑談

ひとりよりふたりあつまる言の葉の友も嬉しき埋火のもと

晩鐘

あはれさは雲雀もそらにしりぬらん霞のおくの入相のかね

枯野霜

枯尾花おびくかたより消ねそめて朝日にぬるゝ野邊の初霜

早梅

冬おがら霜もまだ見ぬうら里は梅さへ時をわすれてぞ咲く

水上落葉

をし鳥もうきすや空にたぐるらん汀かくして紅葉散るおり

枯野月

月ひとりふけゆく野邊のすゝき原霜より外に咲く花もおし

深谷講習會ゝはじめて臨講しける日山本樓の宿

りに人々あつまりて酒をすゝめ席上にて題いだし歌なぐよむに　暮秋眺望

面やせてゝてる秩父の山のはにけふも時雨の雲を見るかな

また　松

千代をへしみぐり深谷の一つ松里の榮もかゝれとぞおもふ

とよめるは此地八景の一なりといふ名木の松をけふ見たればなりかくて盃かさなり興いよ〳〵

そひければ

ひと〳〵の言葉の花もさきたまの里の旅寐ぞ樂しかりける

おぐいふはぐに旅順口陷落の報知來れり筆をおきもあへず

男の兒もれかひある時に生をあひて此音信を聞くぞ嬉しき

とかきて示せを見て一人が講習會開講の日に此吉報を受く豈我國文をして漢文を壓倒せしむる兆ならざらんやとて歡ぶも時にとりての香おりけり

劍

大丈夫の腰にこゝあある秋の霜もろこしが原の草ものこさず

冬月

雪をもつ高嶺の雲につゝまれておぼろにこぼる月の影かな

池氷

月影をくだきなれたるやま風もこぼりてひろきにはの池水

霜

庭の面は初霜ふゝ〻ゝ朝風にこぼれし木の葉かず見ゆるまで

夕木枯

木枯にふきをらゝ〻たる夕山のこずゑさびしき三日月のかげ

雨夜殘雁

山寺の旅寐のまくら雨さむしふくれし雁のこゑもきこゑて

殘紅葉

一さかり秋よりのちの色みせて山したもみぢ夕日さすなり

時雨

花もなき谷の下庵あきくれて苔にしぐれのおとをきくかな

筧氷

山ざとの筧の氷いつまでか世にむすぼゝてはるをまつらん

河合幼稚園より幼兒等におくる歳暮の卵玉にそ

ふる歌をと乞はれて

鞠もつけ凧をもあげよ諸共にめでたき御代の春をむかへて

明治二十八年五月二日印刷
同　年五月五日發行

定價　金二十五錢

著者　大和田建樹
東京市牛込區東榎町廿番地

發行者　内田芳兵衛
仝　市日本橋區大傳馬町二丁目十六番地（電話千二百七十三番）

印刷者　松本義弘
仝　京橋區弓町十三番地

印刷所　績文舍
仝　所（電話　千百四十八番）

發行者の捺印無書は偽版也
版權所有

發兌　老鶴圃

0